深さはP4が25cmと浅いが、他の3本はP1が64cm、P2が79cm、P3が72cmを測りいずれも深い。

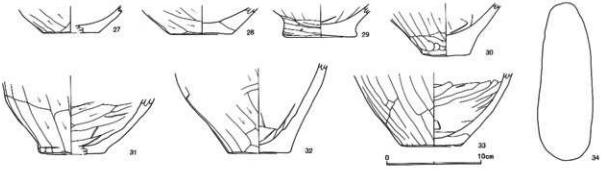
柱穴配置はP4が大きく東側にずれる台形状をなす。柱穴間隔はP1P2が2.49m、P2P3が2.43m、P3P4が3.34m、P1P4が2.62mを測る。

貯蔵穴は存在しない。

カマドは東壁乃至南壁の設置が考慮されるが、第71号住居跡の壁の位置関係をみると、同住居跡カマド壁左側については本住居跡のカマドを想定した場合、接近し過ぎているため南壁に設置されていた可能性が大きい。

出土土器は口縁部が外反する坏形土器を主体とするが、体部内面に暗文を施した坏形土器もある。その他高坏形土器、甕形土器等が出土し、土器以外に土製支脚、編み物石1個体が出土している。

第177図　第72号住居跡出土遺物(2)



第72号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	11.8	(3.5)		B1	B	B	25	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り、黒斑
2	坏	13.0	(3.9)		A1	A	B	20	埋土	口縁外傾、稜部工具ナデ＋篦削り
3	坏	14.0	(4.6)		A1	A	B	25	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
4	坏	13.0	5.1		A1	A	B	30	埋土	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ＋篦削り、黒斑
5	坏	14.0	(3.0)		E2	A	A	20	埋土	口縁外傾、稜部工具ナデ＋篦削り
6	坏	(15.0)	(3.4)		AE2	A	A	20	埋土	口唇外反、段部沈線、稜部工具ナデ＋篦削り
7	坏	(14.0)	(4.9)		A1	B	B	40	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
8	坏	15.1	3.4		AE2	A	A	60	№2	口縁やや内湾、稜部ヨコナデ＋篦削り
9	坏	14.3	4.8		AC1	A	E	60	埋土	口唇沈線肥厚、稜部工具ナデ＋篦削り、黒斑
10	坏	13.5	4.5		A1	B	B	90	埋土、SJ71と接合	稜部棒状工具？＋篦削り、器肉厚い、黒斑
11	坏	14.6	5.0		A1	A	A	60	埋土	口唇沈線、稜部ヨコナデ＋篦削り
12	坏	14.2	4.9		A2	A	A	40	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り
13	脚部		(4.6)		A1	A	E	40	埋土	台付き甕？脚部内面黒色
14	高坏脚部		(5.8)		A1	A	B	80	埋土	接合部器肉厚い
15	土製支脚	(3.5)	(10.8)	(8.5)	E2	B	E	50	埋土	円錐台状、中実
16	小形甕	(13.0)	(4.5)		AE5	A	E	10	埋土	口縁屈曲外反、頸部以下縦篦削り
17	小形甕	11.6	17.7	5.7	DE5	A	B	90	№3	口縁外反、頸部以下縦篦削り、風化摩滅顕著
18	甕	15.2	(7.1)		E5	A	B	25	埋土	口縁外反、外面縦篦削り、輪積み痕
19	甕	16.3	(6.0)		A5	A	B	25	埋土	口縁屈曲外反、外面縦篦削り
20	甕	(17.6)	(7.9)		AE5	A	B	10	埋土	口唇直立、外面縦、斜め篦削りによる段
21	小形甕	(14.3)	(7.4)		E2	A	E	10	埋土、SJ71と接合	口縁外反、頸部以下篦削り
22	壺口縁部	19.2	(6.0)		AE2	A	B	80	埋土	口縁外反、頸部以下横篦削り
23	丸甕	(20.0)	(8.5)		E5	A	E	10	埋土	口縁外反、頸部段以下横、斜め篦削り、黒斑
24	甕	(17.9)	(4.9)		A1	A	A	10	埋土	口縁やや外反、外面縦篦削り？
25	甕	(17.2)	(8.5)		AE5	A	B	10	埋土	口縁やや外反、外面縦篦削りによる段
26	甕底部		(3.2)	(4.0)	CD2	A	E	50	埋土	小形、底面篦削り
27	甕底部		(2.8)	(6.8)	A1	A	B	25	埋土	平底、外面斜め篦削り、内面黒色

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
28	甕底部		(3.0)	6.4	E5	B	B	50	埋土	やや上げ底、篦削り
29	甕底部		(3.5)	7.8	AD5	A	B	60	埋土	凸出底面中央やや上げ底、器肉厚い
30	甕底部		(5.5)	5.2	DE5	A	B	70	埋土	小形平底、篦削り、器肉厚い
31	甕底部		(8.4)	(7.0)	AE5	A	A	50	埋土	凸出平底、篦削り
32	甕底部		(9.0)	6.7	A5	A	B	80	埋土	平底、篦削り、器肉厚い
33	甕底部		(7.8)	6.5	A2	A	A	50	No.3	円環技法か？

第74号住居跡（第164、165、167図）

本住居跡はK3L～M12グリッド付近に位置する。

第8住居跡群のうち最も大形の住居跡である。西端部に位置し、北側は遺構空白域が存在する。

新旧関係は、本住居跡が周辺部分の全ての住居跡を切っており最も新しい。

平面形はカマド対壁が斜行する台形状で、規模は7.97×7.93m、深さ35～40cmを測る。

主軸方位はN－10°－Wを測る。

第1層中からは多量の炭化物、焼土が検出された。

床面はほぼ平坦である。掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。床面出土遺物はカマド周辺部及び南壁中央部下から主に出土している。編物石はカマド左袖付近から、土錘がカマド対壁から集中的に出土している。

壁はほぼ直立し、掘り込みはしっかりしている。

壁溝はカマド部分から貯蔵穴部分、及び南壁下で一部途切れる他は全周する。全体に幅狭く、掘り込みはしっかりしている。

柱穴は4本で、いずれも大形の略円形で深い掘り込みを持つ。P1が径91×83cm、深さ55cm、P2が径89cm、深さ70cm、P3が径99×82cm、深さ80cm、P4が径109×84cm、深さ45cmを測る。P1以外の3本は中心からずれて更に掘り込まれる。径はP2が径55cm、P3が径53cm、P4が径34cmを測る。

柱穴配置は床面はほぼ中央で方形をなすが、住居跡主軸とは若干ずれている。柱穴間隔はP1P2が4.13m、P2P3が4.34m、P3P4が4.37m、P1P4が4.28mを測る。

貯蔵穴はカマド右側にあり、長方形で2段に掘り込まれる。規模は上部が1.25×0.94m、深さ0.2m、下部が0.78×0.57m、深さ0.42mを測る。

カマドは北壁僅かに西よりに設置される。遺存状態は良好である。燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけて僅かに掘り込まれる。箱形と考えられ、規模は0.97×0.60m、深さ0.45mを測る。奥壁寄り中央部から土製支脚が底面から浮いた状態で出土している。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。

煙道部は先端部煙出し口が略円形（径43cm）の焼土範囲として良好に残存する。底面は壁外に向かって緩く傾斜する。規模は1.30×0.53mを測る。

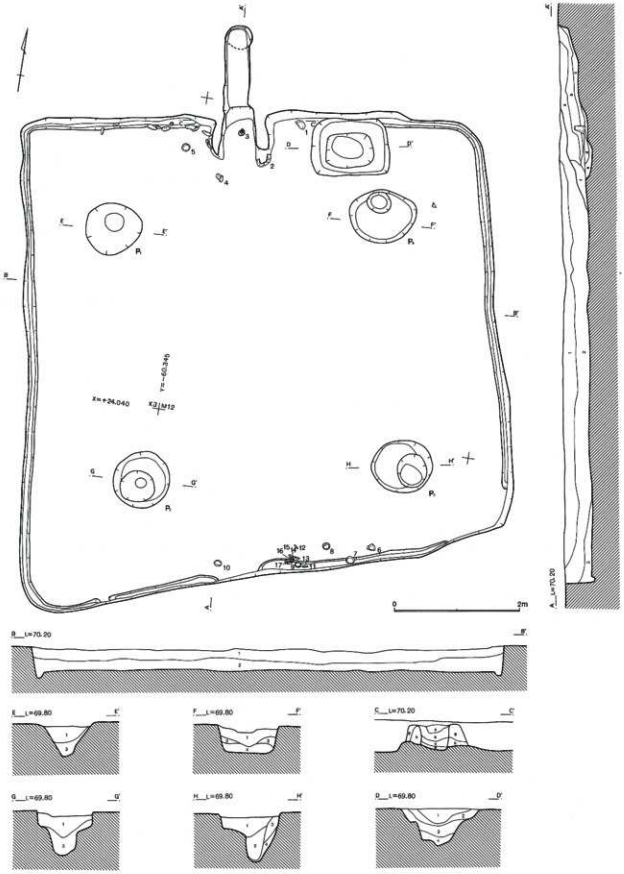
袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は両袖部分及び燃焼部奥壁（楕円形状、径0.58×0.45m）が僅かに掘り込まれる程度である。

須恵器は小破片で埋土中の出土である。土師器は小形の口縁部が外反する坏形土器を主体とし、少量の内湾する坏形土器、高坏形土器、甕形土器等が出土している。その他やや大形の土錘8個体、貝巣穴痕泥岩が8個体（総重量13.2g）出土している。編物石は大形のものと小形のもの合計33個体が出土している。

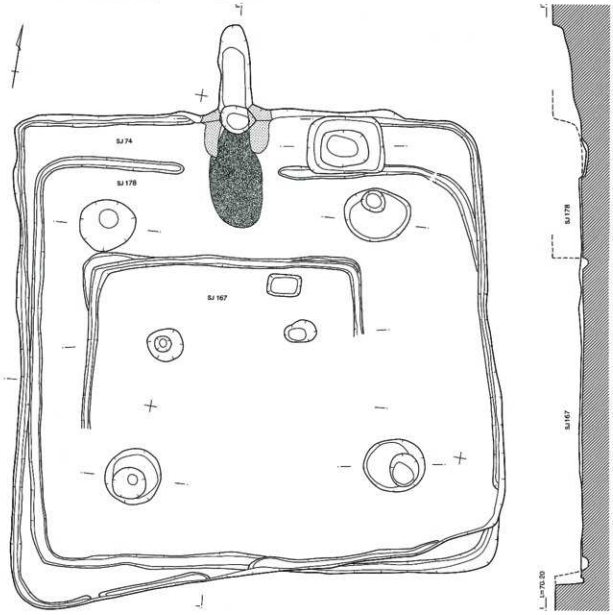
第74号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	11.0	(3.3)		A1	A	C	25	埋土	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ＋篦削り
2	坏	11.0	3.4		AD1	A	A	50	埋土	器肉厚い、稜部ヨコナデ＋篦削り
3	坏	11.0	(3.3)		A1	A	C	25	埋土	口唇肥厚段部ヨコナデ稜部棒状工具＋篦削り
4	坏	11.4	3.7		A1	A	E	25	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り
5	坏	11.1	3.2		A1	A	E	90	No.102	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り

第178図　第74号住居跡(1)



第179図　第74号住居跡(2)、第167・168号住居跡



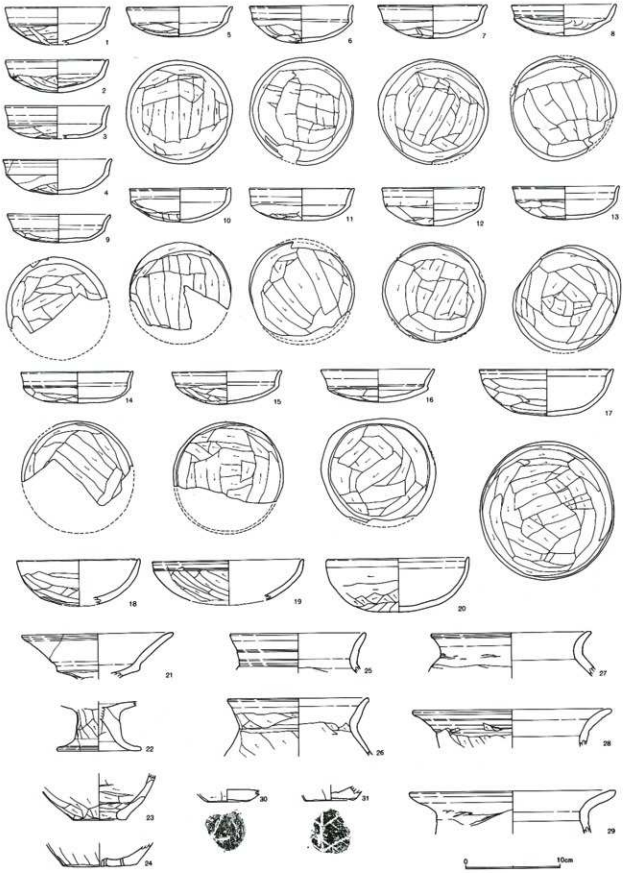
1　暗褐色シルト　焼土ブロック、炭化物少量
2　暗褐色シルト　ローム粒、焼土少量
3　暗褐色シルト　焼土、炭化物多量
a　暗灰褐色シルト　ローム、焼土ブロック多量
b　暗赤褐色シルト　焼土、焼土ブロック大量
c　暗褐色シルト　粘性強、焼土ブロック微量
d　暗褐色シルト　焼土、焼土ブロック、炭化物多量
e　暗褐色シルト　粘性強、焼土、炭化物微量
f　暗灰褐色シルト　焼土、焼土ブロック少量
g　暗灰褐色粘土　焼土ブロック少量
h　暗褐色粘土　焼土粒少量

貯蔵穴
1　褐色シルト　焼土粒多量
2　暗褐色シルト　焼土粒、ブロック多量
3　暗褐色シルト　焼土微量
4　暗灰褐色シルト　粘性強

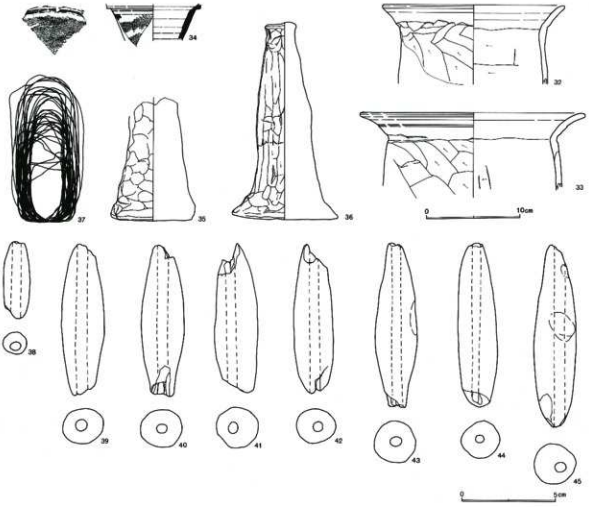
柱穴
1　暗灰褐色シルト　粘性強、焼土粒少、炭化物少量
2　暗灰褐色シルト　焼土粒少量、炭化物少量
3　暗灰褐色シルト　焼土粒多量、炭化物多量
4　暗灰褐色シルト　粘性強

0　2m

第180図　第74号住居跡出土遺物(1)



第181図　第74号住居跡出土遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
7	坏	11.5	3.5		A1	A	E	90	№101	口唇肥厚、稜部棒状工具＋箆削り
8	坏	11.2	3.4		A1	A	C	90	埋土	口縁屈折外反、稜部工具ナデ＋箆削り
9	坏	11.0	3.0		A1	A	B	50	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋箆削り
10	坏	10.7	3.6		A2	A	B	95	№103＋104	口縁直立、稜部ヨコナデ(含未調)＋箆削り
11	坏	11.0	3.4		A5	A	B	80	№100	口縁直立、稜部ヨコナデ＋箆削り
12	坏	11.0	4.1		AC1	A	B	80	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ＋箆削り、黒斑
13	坏	11.1	3.6		A1	A	C	95	№104	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋箆削り
14	坏	11.9	3.3		A1	A	C	80	埋土	口縁やや外反、稜部棒状工具＋箆削り
15	坏	11.5	3.5		A1	A	B	80	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋箆削り
16	坏	11.8	3.4		A1	A	C	90	№5	口唇やや肥厚、稜部棒状工具＋箆削り
17	坏	14.1	4.9		A2	A	C	100	カマド＋№1	口唇外反やや肥厚、稜部ヨコナデ＋箆削り
18	坏	13.0	(4.7)		A1	A	C	25	埋土	口唇直立、稜部ヨコナデ＋箆削り、器肉厚い
19	坏	(16.0)	(4.3)		A1	A	C	20	埋土	口縁短く直立、稜部ヨコナデ＋箆削り
20	坏	(14.0)	4.9		A2	A	C	20	埋土	口縁短く直立、稜部ヨコナデ＋箆削り
21	坏	8.0	(4.7)		AD1	A	B	20	埋土	口縁外反、段部指頭ナデ
22	高坏脚部		(5.2)	9.0	DE1	A	B	50	埋土	裾部短い、器肉厚い
23	甑底部		(4.9)	5.6	A1	A	B	50	埋土	砂質、単孔、外面箆削り、輪積み痕
24	甑底部		(2.5)	8.0	AE4	B	B	25	埋土	小孔５、器肉厚い、黒斑
25	丸　甕	14.3	(4.3)		C 2	A	E	25	埋土	口縁やや外反、段部沈線、頸部横箆削り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
26	丸　甕	14.8	(6.1)		DE2	A	A	20	埋土	口縁外反、頸部横篦削り
27	甕	16.8	(4.7)		D 2	A	A	25	埋土	口縁肥厚外反、頸部横篦削り
28	甕	21.0	(4.0)		AE2	A	E	25	№2	口縁肥厚外折、頸部縦篦削り痕
29	甕	(21.1)	(4.5)		AC1	B	E	20	埋土	口縁肥厚屈折、頸部斜め篦削り痕
30	甕底部		(1.3)	4.6	E5	A	B	70	埋土	やや上げ底、円環技法か？底面木葉痕
31	甕底部		(1.4)	4.8	C 1	A	B	70	埋土	やや上げ底、底面木葉痕
32	甕	19.0	(8.4)		CE2	B	C	20	埋土	口縁外反、頸部斜め篦削り痕
33	甕	23.1	(8.3)		C 2	A	E	25	埋土	口縁肥厚屈折、頸部斜め篦削り痕
34	須恵ハソウ				D1	A	H	30	埋土	ロクロ左回転
35	土製支脚		(12.9)	8.5	A1	B	E	80	№4	円錐台状、中実
36	土製支脚		20.8	11.2	A1	B	E	90	カマド＋№3	円錐台状、中実
38	土　錘	長径(4.1)×最大径1.25×孔径0.5(cm)、重量5.5g								
39	土　錘	長径(8.0)×最大径2.2×孔径0.6(cm)、重量27.4g								
40	土　錘	長径(8.0)×最大径2.25×孔径0.55(cm)、重量30g								
41	土　錘	長径(7.9)×最大径2.25×孔径0.5(cm)、重量34.9g								
42	土　錘	長径(7.9)×最大径2.05×孔径0.5(cm)、重量29.3g								
43	土　錘	長径(8.7)×最大径2.2×孔径0.6(cm)、重量35.9g								
44	土　錘	長径(8.6)×最大径2.0×孔径0.45(cm)、重量33g								
45	土　錘	長径(9.7)×最大径2.3×孔径0.6(cm)、重量32.7g								

第167号住居跡（第179、182図）

本住居跡はK3M12グリッド付近に位置する。

第8住居跡群に属し、第74号住居跡床面下で検出された。したがって同住居跡よりも本住居跡が古い。その他の新旧関係は、重複が著しく不明瞭である。

平面形は南半部が不明確であるが、方形乃至長方形と考えられる。規模は現状で4.52×2.78m、深さ5cm程度である。

住居跡の長軸方位はN－81°－Eを測る。

床面はほぼ平坦である。掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。

床面出土遺物は貯蔵穴及びその周辺部に集中し、貯蔵穴内から完形乃至完形に近い坏形土器が入れ子状態で出土している。

壁は残存部分ではほぼ直立する。

壁溝は現状では全周する。全体に幅狭く、掘り込みはしっかりしている。遺存状態が悪く詳細は不明である。

柱穴は精査にもかかわらず2本しか検出できなかった。P1がほぼ円形で径57×54cm、深さ45cm、P2が楕円形で径51×36cm、深さ55cmを測る。P1は径27cm程の柱痕跡が検出された。

柱穴間隔はP1P2が2.19mを測る。

貯蔵穴は北壁東寄りに位置し、小形の長方形である。規模は0.54×0.32m、深さ0.23mを測る。

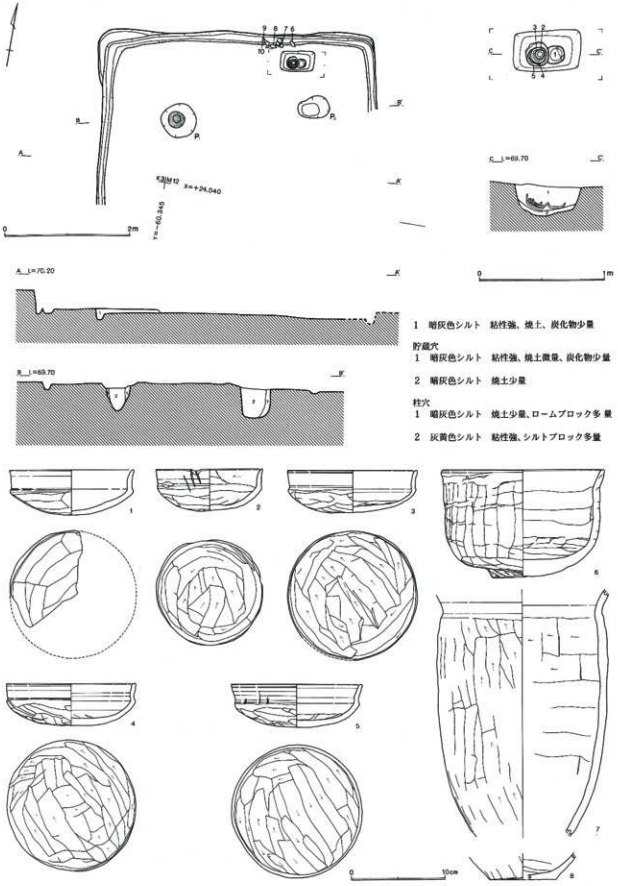
カマドについては燃焼部、煙道部等の痕跡はなく不明確であるが、僅かな焼土分布と貯蔵穴の位置から推定すると、北壁に設置されていたと考えられる。

坏形土器は口縁部が外反するもので、口径が大きいものと小さいものがある。

第167号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	13.2	4.8		A1	A	B	30	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り
2	坏	11.4	4.3		A1	A	B	100	№2	砂質、口唇肥厚、稜部工具ナデ＋篦削り
3	坏	13.8	4.5		C1	A	F	90	№4	口唇沈線、稜部工具ナデ＋篦削り
4	坏	13.7	4.4		C1	A	F	100	№1	口唇沈線、稜部工具ナデ＋篦削り
5	坏	14.0	4.5		C1	A	F	100	№3	口唇沈線肥厚、稜部工具ナデ＋篦削り
6	鉢	17.4	11.4		DE5	A	B	80	№5	頸部以下縦篦削り、平底、輪積み痕
7	甕		(28.5)	(6.3)	AE5	A	B	40	カマド、№7、9	頸段部以下縦篦削り、黒斑
8	甕底部		(2.8)	(7.0)	AC1	A	A	60	埋土	平底、外面縦篦削り

第182図　第167号住居跡(2)・出土遺物



第178号住居跡（第179図）

本住居跡はK3M12グリッド付近に位置する。

第74号住居跡床面下で検出され、同住居跡の拡張の可能性もあるが別住居跡として扱う。第167号住居跡との新旧関係は不明確である。

平面形は東壁が若干斜行するがほぼ長方形で、規模は7.57×6.53mを測る。遺存状態が悪い。

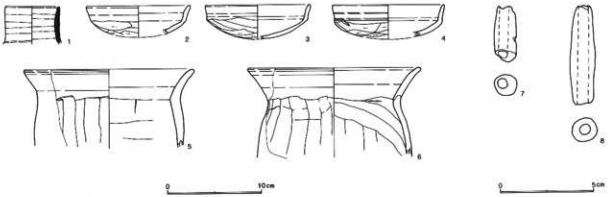
主軸方位はN－9°－Wを測る。

床面は第74号住居跡床面とほとんど重なり、ほぼ平坦面をなす。

壁は残存部分（南壁）ではほぼ直立する。壁溝はほぼ全周する。全体に幅狭く、掘り込みはしっかりしている。

カマドは燃焼部、煙道部等の痕跡はなく不明確であるが、焼土分布から推定すると、北壁に設置されていたと考えられる。

第183図　第178号住居跡出土遺物



第178号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵壺	5.6	(4.0)		D1	A	I	90	埋土	台付き壺か？ロクロ右？回転
2	坏	11.0	(3.0)		A1	A	C	25	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り、黒斑
3	坏	11.2	(3.6)		E5	A	E	30	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り
4	坏	11.8	(3.4)		A1	A	E	25	埋土	段部工具ナデ、稜部工具ナデ＋篦削り、黒斑
5	甕	(18.2)	(8.3)		A2	B	B	25	埋土	口縁外反、頸部以下縦篦削り、黒斑
6	甕	(17.8)	(9.4)		AE5	A	B	10	埋土	口縁外反頸部以下縦篦削り、黒斑、器肉厚い
7	土錘	長径(3.0)×最大径1.2×孔径0.5　2.8g								
8	土錘	長径(5.2)×最大径1.3×孔径0.5　6.9g								

第78号住居跡（第184図）

本住居跡はK3L15グリッド付近に位置する。

北側に若干の遺構空白域が存在する以外は、全て他の住居跡と重複する。新旧関係は、第28、71、82号住居跡が本住居跡を切り、本住居跡が第79、80、159号住居跡を切る。

平面形は重複顕著で不明確であるが、長方形をなすと推定される。規模は推定長5.22×4.54m、深さ30cmを測る。

主軸方位はN－90°－Wを測る。

床面はほぼ平坦で、掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。

壁はやや斜行するが、掘り込みはしっかりしている。

壁溝は北壁下に設置される。幅狭く掘り込みは比較的しっかりしている。

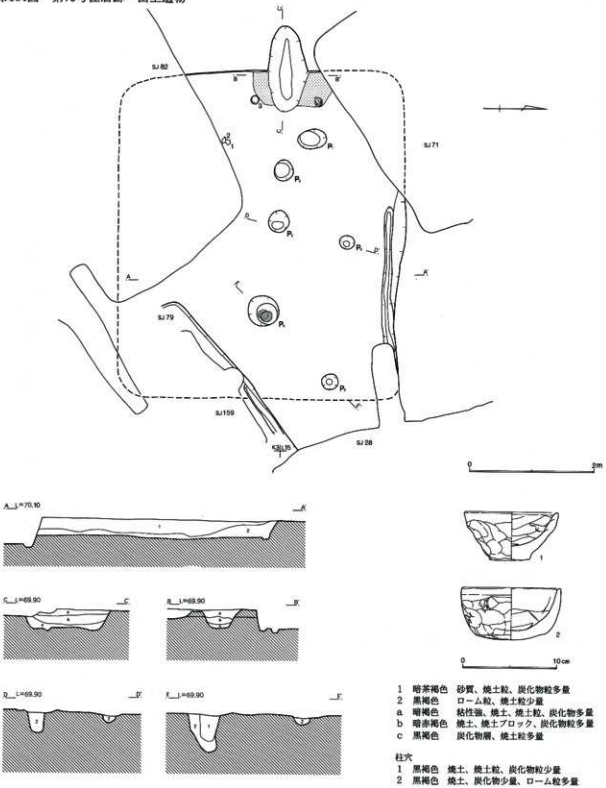
柱穴は6本検出されたが、P3、P4が深い他は浅い。P4は柱痕跡が検出された。柱穴配置は整わず、床面ほぼ中央で直線状をなす。重複部分の相当する位置には検出できなかった。柱穴間隔はP3P4が1.46m、P5P6が2.21mを測る。

カマドは西壁僅かに北寄りに設置される。遺存状態は悪くほとんど残存していない。燃焼部は長楕円形に

掘り込まれる。規模は1.36×0.62m、深さ0.27mを測る。袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。

出土遺物は少なく、カマド左袖付近床面から椀形土器が2個体出土している。いずれも器肉が厚く、1は輪積み痕が残る。

第184図　第78号住居跡・出土遺物



第80号住居跡（第185、186図）

本住居跡はK3L14グリッド付近に位置する。

第８住居跡群のほぼ中央部に位置し、西側は僅かな遺構空白域が存在するが、他は重複関係にある。

新旧関係は、本住居跡が第81号住居跡を切る以外は周辺部の住居跡によって切られる。

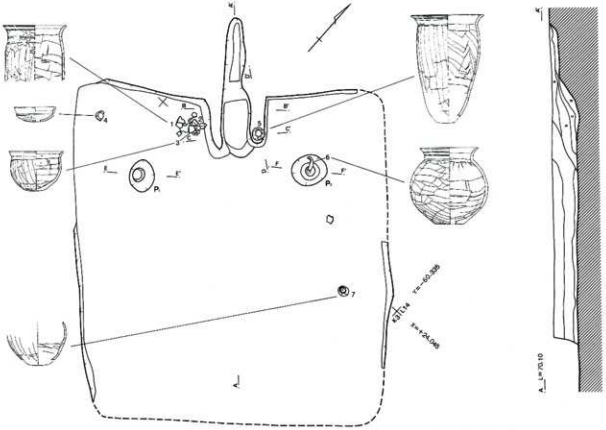
平面形はカマド壁が歪み南東壁が存在しないが、ほぼ方形と推定される。規模は5.48×5.16m、深さ38cmを測る。主軸方位はN－42°－Wを測る。

床面はほぼ平坦で、掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。床面出土遺物は主にカマド及び周辺部から出土している。

壁はほとんど残存していない。壁溝は存在しない。

柱穴は２本で、南東壁側の相当する位置に柱穴は検

第185図　第80号住居跡(1)



1　黒褐色　焼土粒、炭化物粒少量
2　黒褐色　焼土粒少量、ローム粒多量
3　黒褐色　ローム粒、ロームブロック多量
a　暗褐色　粘性強、焼土少、炭化物少量
b　暗褐色　焼土、焼土ブロック、ロームブロック多量
c　暗赤褐色　焼土、炭化粒大量
d　黒褐色　炭化物層、焼土、焼土粒多量
e　暗褐色　粘性強、焼土、炭化物粒多量
f　暗灰褐色　粘土、焼土、焼土粒、炭化物多量
柱穴
1　黒褐色　焼土、焼土粒、炭化物粒少量
2　暗褐色　焼土少量、ローム、ローム粒多量

出できなかった。両者とも底面がさらに掘り込まれる。P1が径51×40cm、深さ75cm、P2が径55cm、深さ60cmを測る。P2上層から落ち込んだような状態で、壺形土器が出土している。貯蔵穴は存在しない。

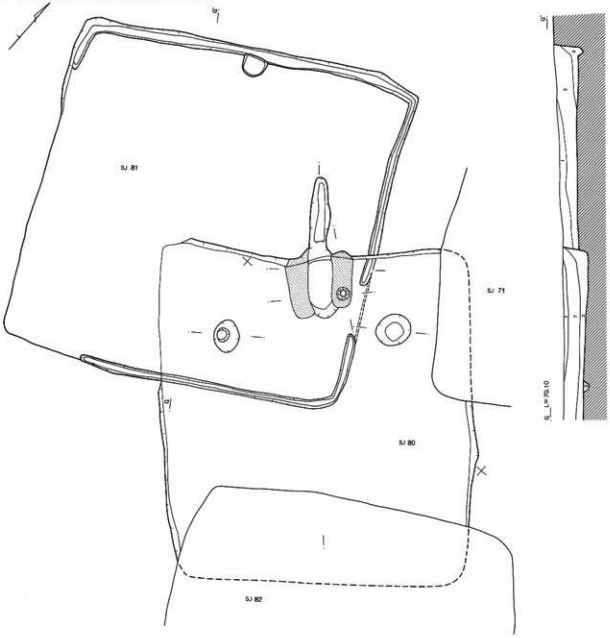
カマドは北西壁ほぼ中央部に設置される。燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけて僅かに掘り込まれる。規模は1.00×0.46m、深さ0.43mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。

煙道部底面はほぼ平坦で規模は1.01×0.32mを測る。

袖部は暗褐色粘質土を主体にして構築され、右袖は芯として甕形土器が使用される。カマド壁は両袖部分とも僅かに掘り込まれる程度である。

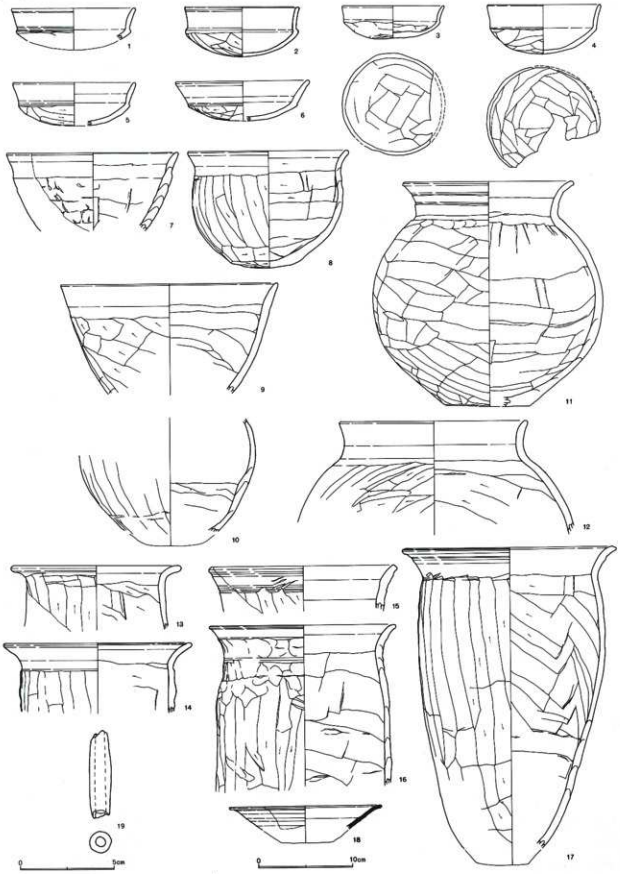
須恵器は小破片で混入と考えられる。土師器は小形の口縁部が外反する坏形土器を主体とし、鉢形土器、壺形土器、甕形土器等が出土し、その他土錘1個体が出土している。

第186図　第80号住居跡(2)、第81号住居跡



1　暗灰色粘質土シルト　粘性強、炭化物少量
2　暗黄褐色粘質土シルト　粘性強、ローム粒多量
3　灰黄色粘質土シルト　粘性強、ローム粒多量

第187図　第80号住居跡出土遺物



第80号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	13.0	(3.8)		A1	A	E	20	埋土	口唇やや肥厚、稜部棒状工具？＋篦削り
2	坏	12.0	5.25		A1	A	A	25	埋土	口唇肥厚平坦、稜部ヨコナデ＋篦削り
3	坏	10.6	3.4		A1	A	C	80	埋土	口縁外反、稜部工具ナデ＋篦削り
4	坏	12.0	5.2		A1	A	B	70	埋土	口縁直立、稜部ヨコナデ＋篦削り、黒斑
5	坏	12.8	(4.7)		A1	A	B	40	№2	口縁外反、稜部棒状工具？＋篦削り
6	坏	14.0	(4.2)		A1	A	B	40	№2	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
7	鉢	(18.0)	(8.3)		A1	B	A	10	埋土	頸部以下ナデ？、輪積み痕顕著、黒斑
8	小形甕	16.7	12.4		E5	B	B	95	№3	口縁外反、頸部以下縦篦削り、二次加熱
9	鉢	23.0	(14.3)		E5	B	C	25	埋土	口縁外傾、稜部ヨコナデ＋篦削り、二次加熱
10	壺胴部		(11.9)		A1	A	C	60	№7	外面縦篦削り、摩滅顕著
11	壺	17.6	23.9	8.9	AC2	A	A	80	№6	口縁有段、頸部以下横、斜め篦削り、黒斑
12	丸甕	19.0	(12.1)		AE5	A	B	30	埋土、SJ81と接合	口縁外反、頸部以下斜め、横篦削り、黒斑
13	甕	17.0	(6.8)		E2	A	B	25	埋土	口縁外反、頸部以下縦篦削り
14	甕	20.0	(7.5)		A1	B	A	25	№6	口縁屈曲外反、頸部以下縦篦削り
15	甑	(19.4)	(4.8)		A1	A	A	10	埋土	口縁やや外反、頸部以下斜め篦削り
16	甕	19.2	(17.1)		A1	A	B	70	№1	口縁屈曲外反、頸部以下縦篦削り＋指頭押圧
17	甕	22.0	33.6	(5.6)	E5	A	B	80	カマド、№5	口縁屈曲外反、頸部以下縦篦削り
18	須恵坏	(16.0)	(2.5)		A1	A	J	10	埋土	ロクロ右？回転、器肉薄い
19	土錘	長径(4.7)×最大径1.15×孔径0.5(cm)、重量5.1g								

第81号住居跡（第186図）

本住居跡はK3L13グリッド付近に位置する。

北側は遺構空白域が存在し、第6住居跡群との境界領域をなす。

新旧関係については、本住居跡が重複関係にある全ての住居跡によって切られる。

平面形は北西壁及び南東、北東壁々溝がかろうじて残存し、ほぼ方形。規模は5.80×5.56m、深さ38cmを測る。

住居跡長軸方位はN－30°－Wを測る。

床面残存部分はほぼ平坦。掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。

壁は北西壁、南西壁の一部が残存するのみであるが、ほぼ直立する。

壁溝は北西壁から南西壁の一部、北東壁の南寄りを除いた部分、及び南東壁の一部を除いた部分に存在する。

柱穴は存在しない。北西壁々溝中央部に接して浅いピットが存在するのみである。

カマドは重複顕著で不明確であるが、南西壁か北東壁に設置されていたと考えられる。袖、燃焼部等の痕跡は全く検出されていない。

図示したものを除いた出土土器の総数は736点、うち坏類181点、、高坏形土器4点、壺形土器3点、甕形土器548点であった。

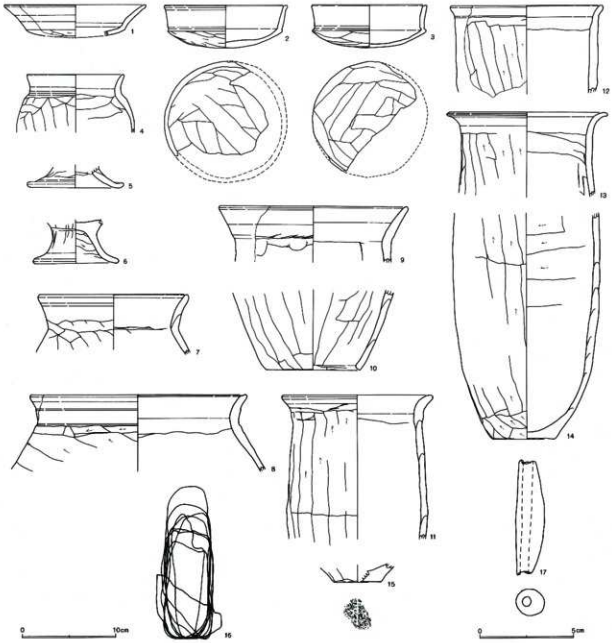
坏形土器は小形で口縁部が外反するものが主体で、口縁部が皿状に大きく開き、体部が浅い坏形土器もある。甕形土器は胴部がほとんど膨らまず、外面は縦篦削りで、頸部まで及び段を残さないものが多い。

土器以外の出土遺物は土錘が1個体、細物石が9個体、貝巣穴痕泥岩が1個体（重量6.27g）出土している。

第81号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	(15.0)	(3.3)		E2	B	F	25	埋土	口縁肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
2	坏	13.0	4.5		A1	A	B	50	埋土	口唇肥厚、稜部棒状工具＋篦削り、黒斑
3	坏	12.6	4.6		A1	A	B	60	埋土	砂質、口巻沈線、稜部ヨコナデ＋篦削り
4	小形壺	10.2	(6.1)		A1	A	B	40	埋土	口縁外傾、頸部以下横、縦篦削り
5	脚部		(2.3)	10.3	A1	A	B	90	埋土	裾端部肥厚、器肉厚い、台付き甕？

第188図　第81号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
6	高坏脚部		(4.5)	8.6	A1	A	B	80	埋土	砂質、小形、内面指頭ナデ
7	甕	15.2	(6.3)		CE2	A	C	25	埋土	口縁外傾、頸部以下縦箆削り＋ナデ
8	壺	22.6	(8.1)		E5	A	C	25	埋土	口唇沈線、頸部以下横箆削り、黒斑
9	甑	(20.0)	(5.8)		E5	B	B	10	埋土	口縁外折、頸部以下縦箆削り＋ナデ
10	甑底部		(8.5)	(10.0)	D2	A	B	10	埋土	大形単孔、黒斑
11	甕	15.6	(15.2)		A1	A	B	25	埋土	口縁外反、頸部以下縦箆り、輪積み痕
12	甕	(16.0)	(9.3)		E5	B	A	20	埋土	口唇外折、頸部以下斜め箆削り、黒斑
13	甕	16.8	(9.0)		AE5	A	A	25	埋土	口縁外反、頸部以下縦箆削り
14	甕		(24.0)	6.5	AE5	A	B	20	埋土	やや上げ底、箆削り、胴部縦箆削り、黒斑
15	甕底部		(1.8)	(5.0)	E5	A	B	30	カマド	平底、底面木葉痕
17	土錘	長径(6.1)×最大径1.5×孔径0.5(cm)、重量9.9g								

第82号住居跡（第189図）

本住居跡はK3M14グリッド付近に位置する。

第8住居跡群のほぼ東端部に位置し、南東壁外側に僅かに遺構空白域が存在する以外は、全ての方向に住居跡が存在する。新旧関係については、本住居跡が重複関係にある全ての住居跡（今回未報告の第161、166号住居跡を含めて）を切る。

平面形は北西、南西壁がやや湾曲するがほぼ方形。規模は6.06×5.68m、深さ42cmを測る。

主軸方位はN－55°－Eを測る。

床面はほぼ平坦、貼り床は存在しないが、カマド周辺部は硬質面が認められた。掘り方は存在しない。

壁は南西壁が比較的良好に残存し、やや傾斜気味である。他の壁は依存状態が悪い。壁溝は住居跡のほぼ北半部に存在する。

柱穴は4本でP4がやや大形（径62cm）の他は径40～50cmである。P3は略長方形をなす。深さはP1が72cm、P2が65cm、P3が62cm、P4が68cmを測る。P1～P3は柱痕跡が認められた。柱穴配置はP4が内側にずれる台形状で、柱穴間隔はP1P2が2.83m、P2P3が2.70m、P3P4が2.41m、P1P4が2.97mを測る。

カマドは北東壁やや南寄りに設置され、依存状態は良好である。燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけて僅かに掘り込まれる。規模は0.94×0.59m、深さ0.25mを測る。奥壁寄り中央部から坏形土器が浮いた状態で出土している。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。煙道部は先端部煙出し口が略方形（径26cm）。規模は1.55×0.24～0.48mを測る。袖部は依存状態が悪く暗灰褐色粘土を主体にして構築される。須恵器は埋土中出土。坏形土器は小形で口縁部が小さく外反する。その他土錘4個体、編物石1個体、貝巣穴痕泥岩1個体（1.85g）が出土している。

第162号住居跡（第189図）

本住居跡はK3M14グリッド付近に位置する。

第82号住居跡によって切られほとんど残存していない。第163号住居跡を切る。

平面形は小形の方形乃至、長方形と考えられ、規模は現状で3.70×0.94mを測る。住居跡長軸方向はN－5°－Wを測る。

床面は第82号住居跡床面とほとんど重なり、ほぼ平坦面をなす。

壁はやや傾斜する。その他の施設は不明である。

第163号住居跡（第189図）

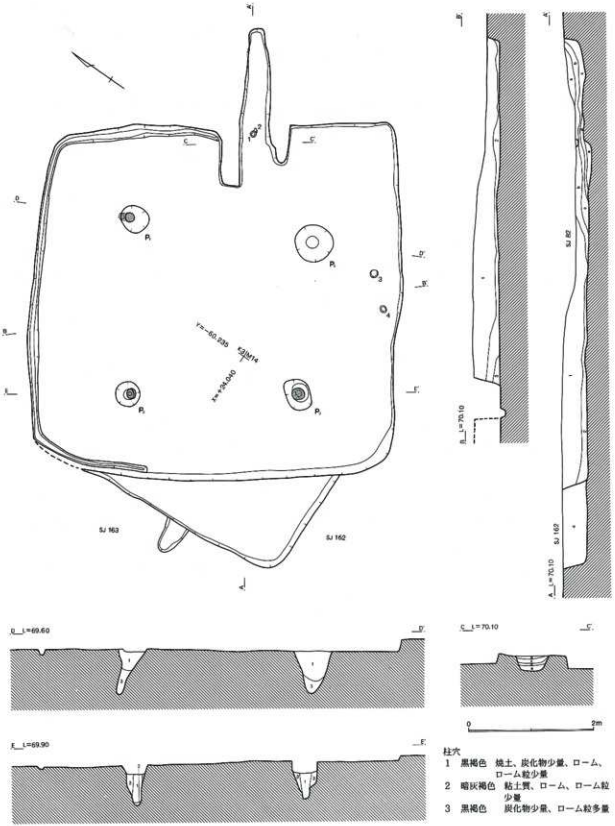
本住居跡はK3M14グリッド付近に位置する。

カマド煙道部がかろうじて残存したものである。第162号住居跡床面に焼土等カマド付け替えの痕跡がなく、同住居跡よって住居跡本体が完全に破壊されたものと判断した。規模は現状で0.52×0.40mを測る。主軸方位はN－95°－Wを測る。出土遺物はない。

第82号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵壷	(11.6)	(3.3)		F1	A	I	20	埋土	ロクロ右？回転
2	椀	(18.0)	(5.2)		AE1	A	B	10	埋土	口縁外反、外面縦篦削り
3	坏	11.3	3.3		A1	B	B	90	No.1	口縁外反、稜部棒状工具＋篦削り、黒斑
4	坏	11.5	3.7		A1	A	B	90	No.4	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
5	坏	12.0	3.7		A1	A	B	100	No.3	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り
6	高坏脚部		(2.1)		A1	A	B	80	埋土	接合部内面粘土貼付け
7	甕	(18.8)	(6.7)		C2	A	E	10	埋土	口縁外反、外面斜め、縦篦削りによる段
8	甕	16.6	(9.2)		D2	A	B	30	埋土	口縁外反、頸部以下縦篦削り、黒斑
9	甕底部		(9.2)	8.0	E2	A	A	80	No.2	やや上げ底、底面木葉痕
11	土錘	長径(2.9)×最大径1.3×孔径0.4(cm)、重量3.3g								
12	土錘	長径(3.3)×最大径1.2×孔径0.4(cm)、重量3.8g								
13	土錘	長径(3.9)×最大径1.45×孔径0.5(cm)、重量5.3g								
14	土錘	長径(5.4)×最大径1.2×孔径0.4(cm)、重量7.6g								

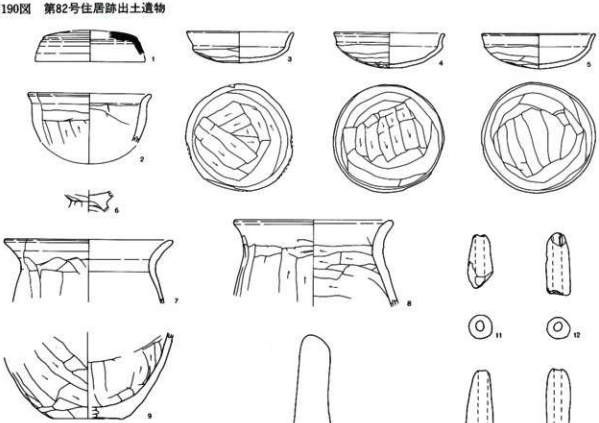
第189図　第82・162・163号住居跡



柱穴
1　黒褐色　焼土、炭化物少量、ローム、ローム粒少量
2　暗灰褐色　粘土質、ローム、ローム粒少量
3　黒褐色　炭化物少量、ローム粒多量

1　暗褐色　ロームブロック多量、焼土ブロック少量
2　灰褐色粘土質　粘性強、ローム粒多量
3　暗褐色　粘性有、ロームブロック多量
4　暗褐色　粘性有、ローム粒、ロームブロック少量
a　暗褐色　灰褐色粘土多量
b　暗赤褐色　焼土、焼土ブロック
c　灰黒色　灰褐色粘土、焼土少量、炭化粒多量
d　暗褐色　灰褐色粘土、焼土、焼土粒多量
e　暗褐色　焼土、焼土粒、焼土ブロック多量

第190図　第82号住居跡出土遺物



第160号住居跡（第191図）

本住居跡はK3L～N14グリッド付近に位置する。

本年度未報告の住居跡が数軒南側に広がっており、これらは第8住居跡群を構成すると考えられる。したがって本住居跡は同住居跡群のほぼ中央部に位置する。

新旧関係は、第82号住居跡によって本住居跡が切られ、第165号住居跡とはかろうじて重複しない。

平面形は南壁はやや斜行するが略方形。東壁はカマド部分で僅かに段をなす。規模は4.90×4.59m、深さ40cmを測る。

主軸方位はN－76.5°－Eを測る。

床面は東半部がやや凹凸目だつ。掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。

第3層からは多量の炭化物が検出され床面に及び、ほぼ北半部に分布する。河原石を含めて、編物石がP2付近の床面から集中出土している。

壁は部分的に遺存状態が悪く一定しないが、残存する部分ではほぼ直立し掘り込みはしっかりしている。

壁溝はカマド壁、北壁東半部を除いて設置される。全体に幅狭く、掘り込みはしっかりしている。

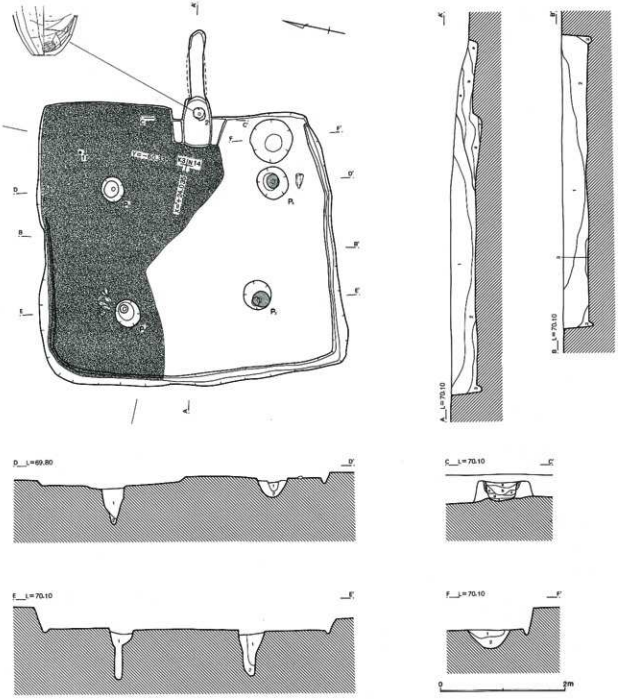
柱穴は4本で、P1が径40×36cm、深さ62cm、P2が径44×40cm、深さ79cm、P3が径46cm、深さ72cm、P4が径52cm、深さ31cmを測る。P3、P4は不明瞭ながら柱痕跡が認められた。

柱穴配置はP4がずれた台形状をなす。柱穴間隔はP1P2が1.94m、P2P3が2.11m、P3P4が1.93m、P1P4が2.57mを測る。

貯蔵穴はカマド右側にあり、ほぼ円形。規模は径70cm、深さ30cmを測る。

カマドは東壁やや南寄りに設置される。遺存状態は

第191図　第160号住居跡

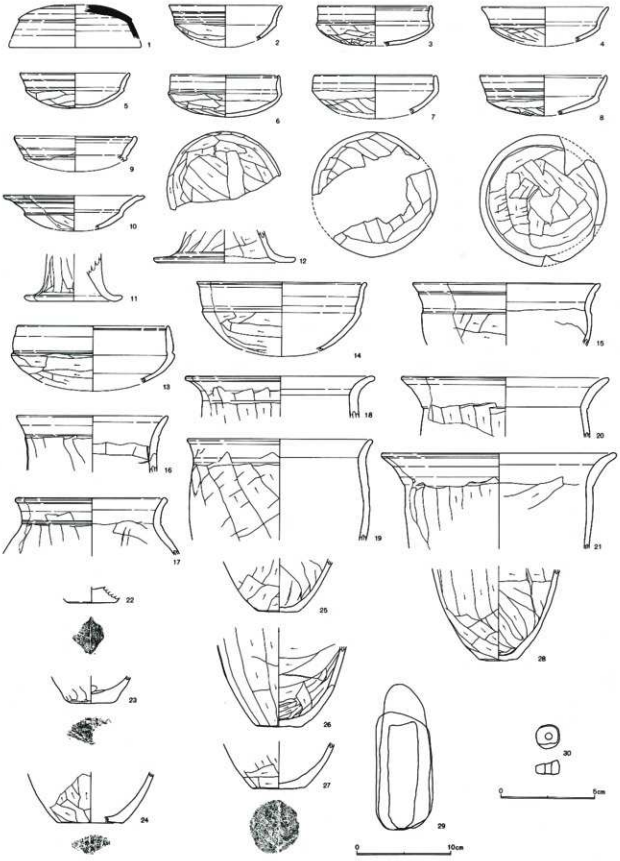


1　暗褐色シルト　　砂質、焼土ブロック、炭化物少量
2　暗褐色シルト　　砂質、ローム粒、焼土少量
3　黒褐色シルト　　焼土、炭化物多量
a　暗褐色シルト　　ロームブロック、焼土ブロック多量
b　灰褐色シルト　　砂質、焼土ブロック少量
c　暗褐色シルト　　焼土ブロック微量
d　灰褐色シルト　　焼土、焼土ブロック、炭化物多量
e　黒灰褐色シルト　粘性強、焼土、炭化物微量
f　暗褐色シルト　　焼土、焼土ブロック大量

貯蔵穴
1　灰色シルト　粘性強、炭化物、焼土粒多量
2　灰色シルト　ローム粒・ロームブロック多量

柱穴
1　暗灰色シルト　　粘性強、ローム粒、焼土粒子少量
2　暗黄灰色シルト　ローム粒、ロームブロック多量

第192図　第160号住居跡出土遺物



良好である。燃焼部底面は良く焼けており、焚き口から奥壁に向かって緩く傾斜する。規模は0.79×0.45m、深さ0.40mを測る。奥壁寄りのやや右袖寄りで甕胴部下半が浮いた状態で出土している。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。

煙道部底面は壁外に向かって緩く傾斜する。規模は1.06×0.30mを測る。

袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。両袖内面に加熱による赤変硬化が認められる。

出土遺物は坏形土器、高坏形土器、甕形土器等がある。須恵器蓋は小破片で埋土中の出土である。

坏形土器は法量に大・小がある。小形の坏は口縁部が外反するものを主体とし、皿状に開くものもある。甕形土器は胴部はほとんど膨らまず寸胴である。

その他臼玉1個体、編物石3個体、貝巣穴痕泥岩2個体（総重量4.02g）が出土している。

第164号住居跡（第193図）

本住居跡はK3N13グリッド付近に位置する。第165号住居跡のカマド付け替えの可能性もあるが、同住居跡床面上の柱穴の存在を考慮し、同住居跡によって切られたものと把握しておく。

煙道部の規模は現状で1.10×0.36m、深さ21cmを測る。長軸方向はN－73.5°－E。柱穴は3本。出土遺物はない。

第165号住居跡（第193図）

本住居跡はK3N12～13グリッド付近に位置する。

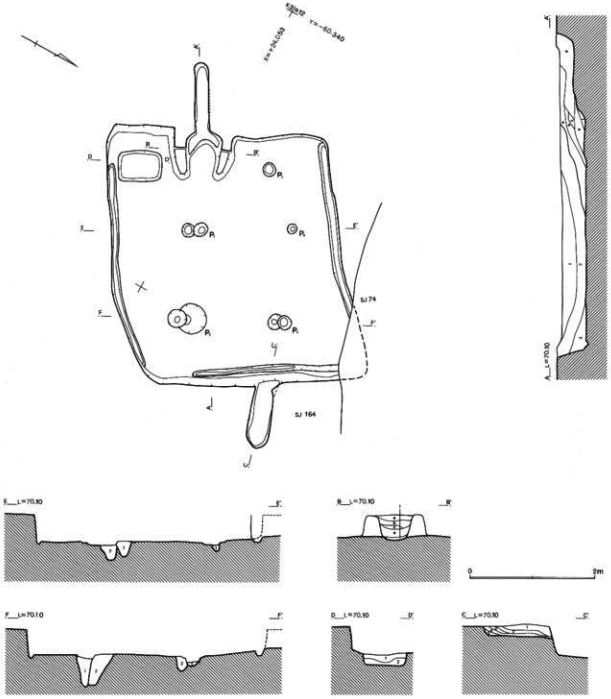
第8住居跡群は南側に本年度未報告住居跡があり、それら数軒を含めると、本住居跡は住居跡群のほぼ中央部に位置する。東側に僅かな遺構空白域がある。

新旧関係については、現状では第74号住居跡によって切られ、第160号住居跡とはかろうじて重複していない。

第160号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋	(13.8)	(4.5)		F1	A	I	10	埋土	ロクロ右？回転
2	坏	12.0	(3.7)		A1	A	B	50	埋土	段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り
3	坏	12.1	(4.2)		C1	A	F	25	埋土	口唇沈線、稜部棒状工具＋篦削り
4	坏	13.4	(3.7)		A1	A	E	25	埋土	砂質、口唇やや肥厚、稜部棒状工具＋篦削り
5	坏	11.6	3.7		A1	A	C	40	埋土	段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り、摩滅顕著
6	坏	11.6	4.4		C1	A	D	50	埋土	砂質、口唇内面肥厚、稜部棒状工具＋篦削り
7	坏	13.0	(4.1)		A1	A	B	70	カマド	砂質、稜部ヨコナデ＋篦削り、器肉厚い
8	坏	13.5	(4.1)		A1	A	A	90	カマド	砂質、段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り
9	坏	12.8	(2.6)		A1	A	A	25	カマド	砂質、段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り
10	坏	(15.0)	(3.6)		A1	A	B	10	埋土	口唇外反、段部沈線、稜部工具＋篦削り
11	高坏脚部	10.4	(5.0)		A1	B	E	30	埋土	裾部短い、外面篦削り
12	高坏脚部		(3.5)	15.0	A1	B	E	50	埋土	長脚、裾部短い、外面篦削り、黒斑
13	坏	16.2	(6.0)		C1	A	E	25	埋土	口唇沈線、稜部工具ナデ＋篦削り
14	坏	(18.0)	(7.2)		A1	A	A	20	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
15	鉢	(20.0)	(11.5)		AC2	B	F	20	埋土	口唇沈線、頸部棒状工具＋篦削り、二次加熱
16	甕	16.2	(5.9)		AE5	B	B	10	埋土	口縁屈曲外反、頸部以下縦篦削り
17	丸甕	(16.2)	(6.1)		E5	B	B	10	埋土	口唇肥厚、頸部以下縦篦削り
18	甕	20.2	(4.3)		A5	B	B	10	埋土	口唇やや肥厚、口縁外反、頸部以下縦篦削り
19	甕	19.8	(10.6)		E5	A	B	25	埋土	口唇肥厚口縁屈曲外反、頸部以下斜め篦削り
20	甕	(22.0)	(6.3)		AE5	B	B	20	カマド	口縁外反、頸部縦篦削りによる段、黒斑
21	甕	(25.0)	10.0		AE5	B	B	20	埋土	口縁外反、頸部縦篦削り痕
22	甕底部			4.0	E5	B	B	10	埋土	平底、底面木葉痕、器肉厚い
23	甕底部		(2.9)	5.0	A1	A	B	25	埋土	凸出平底、底面木葉痕
24	甕底部		(5.4)	(7.0)	E5	B	C	20	埋土	平底、底面木葉痕
25	甕底部		(5.7)	4.2	CE2	A	B	70	埋土	平底篦削り、二次加熱
26	甕底部		(8.6)	5.1	AE5	A	A	80	№2	小形平底篦削り、胴部縦篦削り、黒斑
27	甕底部		(4.9)	5.6	AE5	A	B	80	カマド	平底、底面木葉痕、二次加熱
28	甕底部		(9.7)	4.2	CE2	A	A	80	№2	小形平底篦削り、胴部縦、斜め篦削り、黒斑
30	臼玉	1.1（上径）×1.15（下径）×0.75（厚さ） 1.68g								

第193図　第164・165号住居跡



第１６４号住居跡土層註

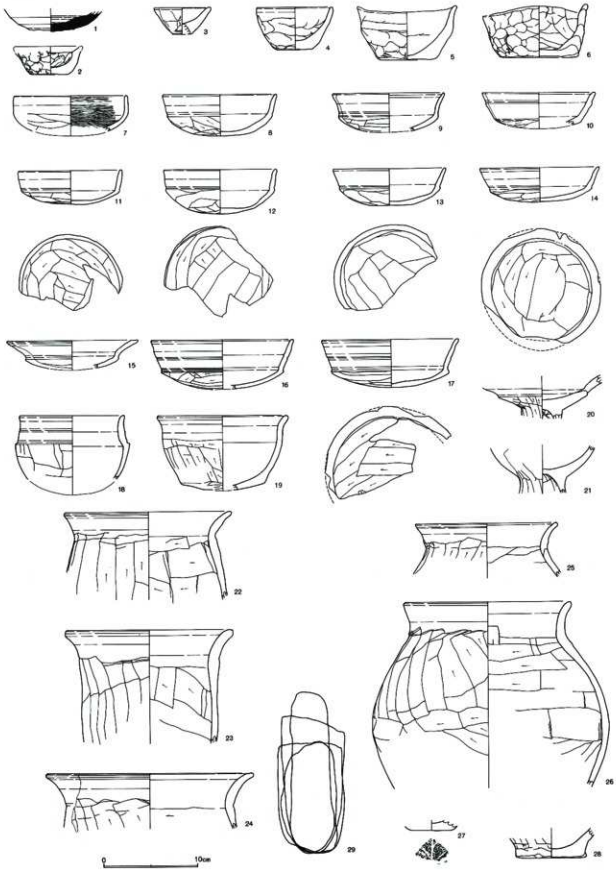
a　暗灰褐色シルト　粘性強、天井崩落土
b　暗灰褐色シルト　焼土ブロック多量
c　暗黄灰色シルト　焼土ブロック少量、炭化物少量
d　黄灰色シルト　粘性強、煙道燃焼面の変色層

1　暗褐色シルト　砂質、焼土ブロック、炭化物少量
2　暗褐色シルト　砂質、焼土少量
3　灰黄褐色シルト　砂質、炭化物少量
a　暗褐色シルト　ロームブロック、焼土ブロック多量
b　灰褐色シルト　砂質、焼土ブロック少量
c　暗褐色シルト　焼土ブロック微量
d　黒灰褐色シルト　焼土ブロック、炭化物多量
e　黒灰褐色シルト　粘性強、焼土、炭化物微量
f　暗褐色シルト　焼土ブロック少量

貯蔵穴
1　暗褐色シルト　粘性有、焼土ブロック少量
2　暗褐色シルト　炭化物少量

柱穴
1　黒灰色シルト　粘性強、炭化物少量、柱痕跡
2　暗黄灰色シルト　粘性強、ロームブロック多量

第194図　第165号住居跡出土遺物



平面形は東端部が屈折するがほぼ方形。規模は4.25×4.07m、深さ45cmを測る。主軸方位はN−121°−Wを測る。

床面はやや凹凸が有る。貼り床、掘り方は存在しない。

壁は北壁以外は比較的良好に遺存し、ほぼ直立する。壁溝は西壁、東壁両端部を除いて存在する。

主柱穴は4本でカマド右側にも1本存在する。比較的径が小さく、P2が深く他は浅い。主柱穴配置は平行四辺形状で、P1がカマド前面に位置する。柱穴間隔はP1P2が1.48m、P2P3が1.70m、P3P4が1.51m、P1P4が1.44mを測る。

貯蔵穴はカマド左側で長方形、規模は0.71×0.49m、深さ0.20mを測る。

カマドは西壁やや南寄りに設置される。燃焼部規模は0.76×0.55m、深さ0.41mを測る。奥壁から段をなして煙道部へ移行する。規模は1.09×0.22mを測る。

第168号住居跡（第196図）

本住居跡はK3M11グリッド付近に位置する。

第8住居跡群の西端部である。本住居跡が第172号住居跡を切り、第74、169号住居跡によって切られる。

平面形は小形の方形乃至、長方形と考えられ、規模は現状で3.08×2.72mを測る。

住居跡長軸方向はN−15°−Wを測る。

床面は第74号住居跡床面とほとんど同一で、ほぼ平坦面をなす。

壁は残存する部分ではほぼ直立し、壁溝が巡る。重複する住居跡の相当する位置に、壁溝を検出することはできなかった。

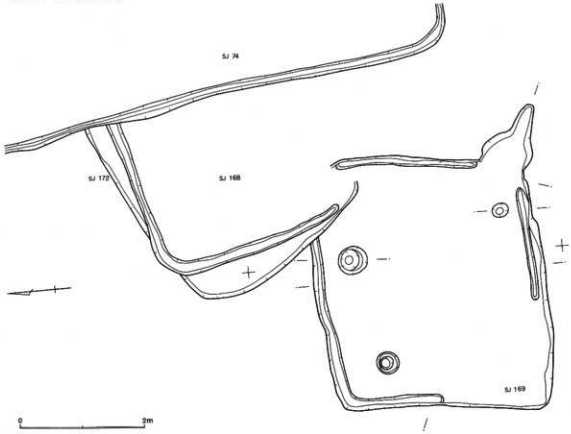
カマドは東壁か南壁に設置されたと考えられるが、柱穴等その他の施設は検出できなかった。

重複顕著にもかかわらず出土遺物は多く、坏形土器、甕形土器等がある。

第165号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵壺		(2.0)	4.8	D1	A	H	50	埋土	台付き壺か？ロクロ左回転、体下半部篦削り
2	ミニチュア	(7.0)	3.1	4.3	AE5	A	B	70	カマド	平底、体部指頭ナデ、黒斑
3	ミニチュア	6.0	(2.8)		AC1	A	F	25	カマド	内外面指頭ナデ
4	ミニチュア	8.0	4.5	4.3	A1	A	A	50	埋土	砂質、平底、体部指頭ナデ
5	椀	10.5	5.6		E2	A	B	50	埋土	平底篦削り、体部指頭ナデ、黒斑
6	椀		5.6	8.3	A5	B	B	50	埋土	平底、体部指頭ナデ、黒斑
7	坏	(11.8)	(3.7)		A1	B	B	20	貯蔵穴	口縁内湾、稜部ヨコナデ＋篦削り、内面黒色
8	坏	12.0	4.1		A2	B	B	25	埋土	口縁外反、稜部工具ナデ＋篦削り、内面黒色
9	坏	(11.8)	(4.0)		A1	A	C	20	埋土	口縁内湾、稜部棒状工具＋篦削り、二次加熱
10	坏	(11.8)	(3.4)		A1	A	E	20	埋土	段部沈線、稜部工具ナデ＋篦削り、器肉厚い
11	坏	10.7	3.5		A2	A	B	50	埋土	口縁肥厚、稜部工具ナデ＋篦削り
12	坏	11.8	4.7		A1	A	C	60	埋土	段部ヨコナデ稜部棒状工具＋篦削り器肉薄い
13	坏	12.0	3.9		A1	A	C	50	埋土	段部ヨコナデ、稜部工具ナデ＋篦削り
14	坏	12.6	3.7		A1	A	E	90	埋土	口縁外反、稜部棒状工具＋篦削り
15	坏	(14.0)	(2.9)		A2	A	B	20	埋土	口唇外反、稜部工具ナデ＋篦削り
16	坏	15.0	(5.2)		C1	A	A	25	埋土	口唇肥厚、段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り
17	坏	14.3	5.1		A2	A	F	50	埋土	口唇肥厚、段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り
18	坏	11.0	(6.7)		A2	A	C	25	埋土	口唇肥厚、段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り
19	鉢	13.6	(7.9)		E5	B	B	25	埋土	口縁外反、頸部工具ナデ以下篦削り、黒斑
20	高坏		(4.5)		A1	A	B	60	埋土	器肉厚い、段部工具ナデ＋篦削り
21	高坏		(5.2)		AD1	B	B	70	カマド＋SJ178と接合	内面絞り痕、摩滅顕著
22	甕	17.6	(9.3)		AE5	A	B	25	カマド	口縁外反、頸部縦篦削り痕、器肉厚い
23	甕	17.3	(12.0)		C1	A	E	25	埋土	口縁肥厚外反、頸部縦篦削り痕、黒斑
24	甕	(21.6)	(5.9)		C2	A	E	20	カマド	口縁外反、頸部縦篦削りによる段
25	甕	15.0	(5.9)		AD5	A	B	30	埋土	口縁外反、頸部以下縦篦削り
26	丸甕	17.5	(19.7)		AE5	A	B	70	埋土	口縁肥厚外反、頸部斜め篦削り痕、黒斑
27	甕底部		(1.0)	4.0	C1	A	B	10	埋土	平底、底面木葉痕
28	甕底部		(3.2)	7.4	AC1	B	B	80	埋土	ほぼ平底、器肉厚い

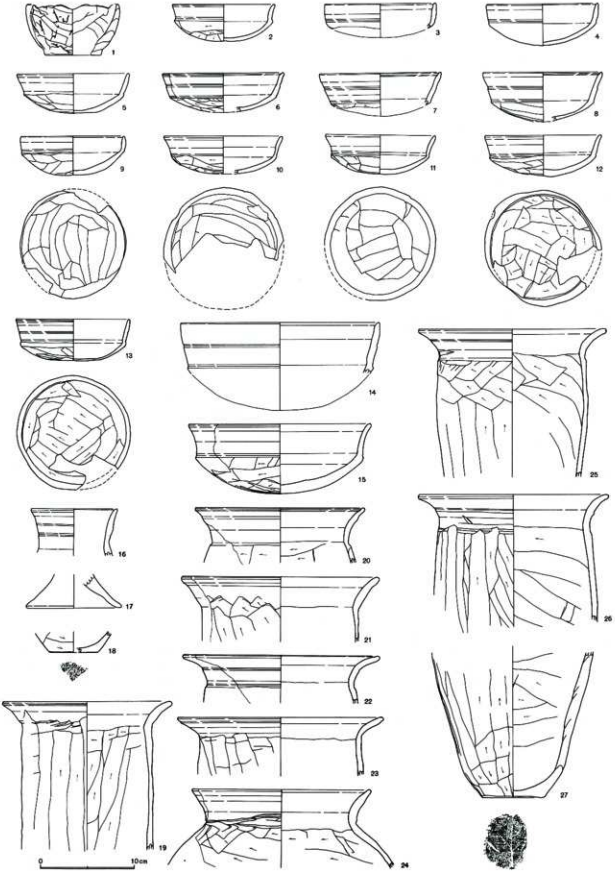
第195図　第168・172号住居跡



第168号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	鉢	(9.7)	(5.4)	5.9	A1	A	B	20	埋土	平底、体部指頭ナデ(未調合)
2	坏	10.9	3.9		A1	A	B	50	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り、摩滅顕著
3	坏	11.8	(2.7)		A1	A	B	25	埋土	口縁直立段部ヨコナデ稜部棒状工具＋篦削り
4	坏	12.0	4.4		A1	A	B	40	埋土	稜部ヨコナデ＋篦削り、器肉薄い
5	坏	12.0	4.2		A1	A	B	60	埋土	口縁外反、稜部棒状工具＋篦削り、摩滅顕著
6	坏	(13.0)	(4.1)		C1	A	F	20	埋土	段部工具、稜部工具ナデ＋篦削り
7	坏	13.0	(3.5)		AC1	A	A	30	埋土	口唇沈線段部工具ナデ稜部工具ナデ＋篦削り
8	坏	12.7	(5.2)		A1	A	B	30	埋土	口唇内湾、段部工具、稜部工具ナデ＋篦削り
9	坏	11.1	4.1		A1	B	B	70	埋土	口縁内湾、稜部棒状工具＋篦削り、黒斑
10	坏	12.5	(4.0)		A1	A	C	50	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り、二次加熱
11	坏	11.7	4.1		A1	A	C	80	埋土	口縁外反、稜部棒状工具＋篦削り
12	坏	12.3	4.4		A1	A	H	80	埋土	稜部棒状工具＋篦削り、二次加熱発泡変色
13	坏	12.0	4.4		AC1	A	E	80	埋土	段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り、黒斑
14	坏	21.2	(5.4)		CE2	A	B	40	埋土	段部沈線、稜部棒状工具＋篦削り、黒斑
15	坏	(19.5)	7.4		A1	A	E	40	埋土	口唇外反、稜部ヨコナデ＋篦削り、黒斑
16	小形壺	9.1	(5.0)		E 1	A	E	80	埋土	口縁部沈線
17	脚部		(3.5)	10.0	A1	A	B	30	埋土	摩滅顕著
18	甕底部		(2.3)	(5.0)	E 1	A	B	10	埋土	平底、底面木葉痕
19	甕	18.1	(15.7)		AE5	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部縦篦削りによる段
20	甕	18.0	(5.8)		DE2	A	B	20	埋土	口縁屈曲外反、頸部横篦削り痕
21	甕	(21.0)	(6.8)		CE2	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部縦篦削り痕、黒斑
22	甕	(21.0)	(5.1)		CE2	A	C	20	埋土	口縁屈曲外反、頸部横篦削り？二次加熱

第196図　第168号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
23	甕	22.0	(6.1)		DE2	A	E	25	埋土	口縁外折、頸部以下縦篦削り、二次加熱
24	丸甕	(19.0)	(8.3)		E5	A	E	25	埋土	口縁外反、頸段部横篦削り、黒斑
25	甕	20.0	(15.5)		E5	B	B	20	埋土	口縁屈曲外反、頸部以下斜め、縦篦削り
26	甕	20.2	(13.5)		CD2	A	A	30	埋土	口縁屈曲外反、頸部以下縦篦削り、黒斑
27	甕		(15.5)	6.3	AE5	A	B	70	埋土	平底木葉痕、胴部縦篦削り、黒斑

第172号住居跡（第196図）

本住居跡はK3M11グリッド付近に位置する。

第8住居跡群の西端部に存在し、北西側は第7住居跡群との間に僅かな遺構空白域がある。

本住居跡が第74、168、169号住居跡によって切られ、北、東壁が残存するのみである。

平面形は小形の方形乃至、長方形と考えられ、規模は現状で3.56×3.33mを測る。

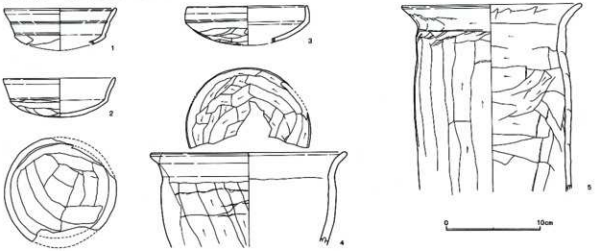
住居跡の長軸方向はN－63°－Eを測る。

床面は第168号住居跡とほとんど同一である。

壁は残存する部分ではほぼ直立する。壁溝は存在しない。カマドは東壁か南壁に設置されたと考えられる。柱穴等その他の施設は検出されなかった。

重複顕著であるが比較的遺物は出土している。

第197図　第172号住居跡出土遺物



第172号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	12.0	(3.8)		AC1	B	A	25	埋土	段部棒状工具稜部棒状工具＋篦削り二次加熱
2	坏	12.0	4.1		A1	A	B	80	埋土	砂質、口唇やや内溝、稜部ヨコナデ＋篦削り
3	坏	12.8	(4.0)		A1	A	B	50	埋土	砂質、口縁内傾、稜部ヨコナデ＋篦削り
4	甕	21.0	(9.7)		AE5	B	B	20	埋土	口縁外反、頸部以下斜め篦削り、二次加熱
5	甕	19.2	(19.9)		AE5	A	B	25	埋土	口縁屈曲外反、頸部横、縦篦削り

9．第9住居跡群

第156号住居跡（第199、200図）

本住居跡はK3M2グリッド付近に位置する。本年度未報告の住居跡が南西側にあり、これらを含めて第9住居跡群を構成すると考えられる。本住居跡は同住居跡群の北西側に位置する。南側の住居跡群、及び第7住居跡群とはやや間隔がある。新旧関係は、第170号住居跡によって本住居跡が切られ、第157号住居跡を切る。

平面形は方形。規模は4.51×4.39m、深さ35cmを測る。主軸方位はN－70°－Eを測る。

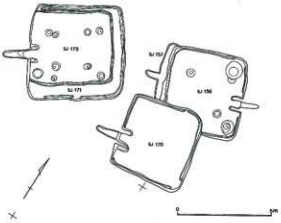
床面は東、北側に向かってやや傾斜する。貼り床は存在しない。

壁はやや傾斜するが掘り込みはしっかりしている。

壁溝はカマド部分、北東部を除いて設置される。全体に幅狭く、掘り込みはしっかりしている。

柱穴は2本で、P2が径43cm、深さ38cm、P3が径42cm、深さ23cmを測る。その他P1のカマドよりにピットが検出され、深さ66cmと深い。柱穴はほぼ対角線上に配置される。柱穴間隔はP2P3が2.60mを測る。

第198図　第9住居跡群

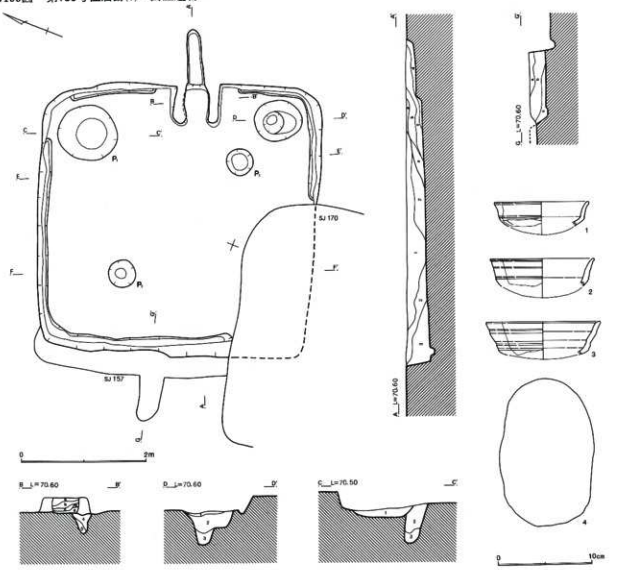


貯蔵穴はカマドの両側、いずれも住居跡の隅に寄っている。P1は大形の円形で規模は径98cm、深さ13cmを測る。カマド右側は楕円形で、2段に掘り込まれピット状（径32cm、深さ27cm）に深くなる。規模は径78×66cm、深さ29cmを測る。

カマドは東壁やや南寄りに設置される。燃焼部底面はほぼ平坦で、比較的良く焼けている。規模は0.69×

▲住居跡群調査風景

第199図　第156号住居跡(1)・出土遺物



1　暗褐色　硬質　ロームブロック少量
2　暗褐色　ロームブロック、焼土、炭化物少量
3　暗褐色　ローム粒少量
4　暗褐色　焼土粒、炭化物多量
5　暗褐色　ローム粒、ロームブロック多量
a　暗褐色　焼土粒、炭化物微量
b　暗褐色　ローム粒、焼土少量
c　黒褐色　粘性強、焼土、炭化物多量
d　赤褐色　焼土粒、炭化物多量
e　黒褐色　焼土粒多量

第157号住居跡
a　暗褐色　焼土ブロック・ロームブロック多量
b　暗褐色　焼土、ロームブロック多量
c　暗褐色　粘性強、焼土ブロック多量

貯蔵穴
1　暗褐色　ロームブロック少量
2　暗褐色　ローム多量
3　暗褐色　炭化物少量

0.39m、深さ0.24mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。煙道部は住居主軸に対してわずかに角度をなしており N－65°－E を測る。底面は壁外に向かって緩く立ち上がる。規模は0.86×0.26mを測る。袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁はほとんど掘り込まれず、明瞭な掘り方は存在しないが、右袖下部は楕円形状のピット（径39×31cm、深さ34cm）が掘り込まれる。

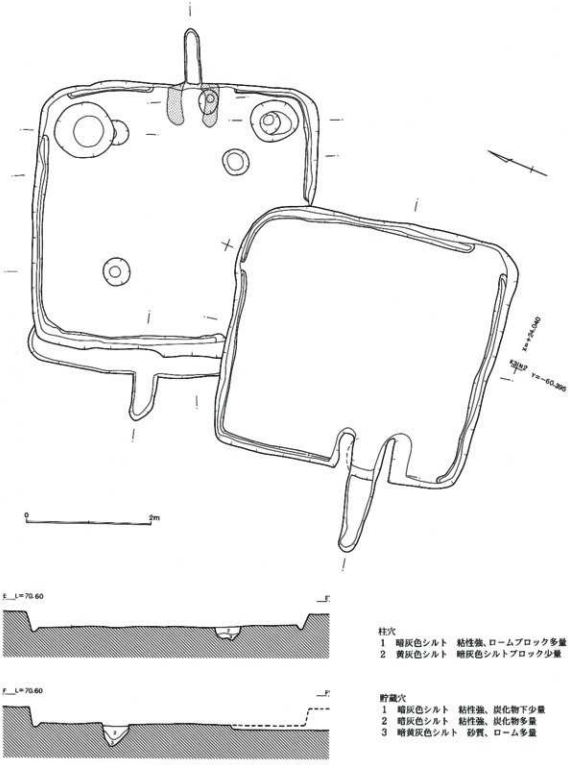
出土遺物は少量で、坏形土器は小形で口縁部が外反するものと有段口縁のものがある。

第157号住居跡（第200図）

本住居跡はK3M2グリッド付近に位置する。第156号住居跡のカマド付け替えの可能性もあるが、床面段差を考慮し、同住居跡によって切られたものと把握しておく。第170号住居跡に切られる。

現状での長辺は3.10m、煙道部の規模は0.72×0.38m、深さ26cmを測る。長軸方向はN－105.5°－W。袖部の痕跡はない。出土遺物はない。

第200図　第156号住居跡(2)、第157・170号住居跡(1)



第170号住居跡（第200、201図）

本住居跡はK3M～N2グリッド付近に位置する。

第9住居跡群の東側の小群に属するが、西側の一群とは僅かに間隔があり重複しない。南側は遺構空白域が存在する。

新旧関係は本住居跡が最も新しく、第156、157号住居跡を切る。

平面形は北東隅が湾曲気味の方形で、規模は4.48×4.16m、深さ38cmを測る。

主軸方位はN－102°－Wを測る。

床面はほぼ平坦で、掘り方は存在せず、貼り床も検出できなかった。

壁は遺存状態がよく、ほぼ直立する。

壁溝はカマド部分、南東隅及び北壁の一部を除いて設置される。

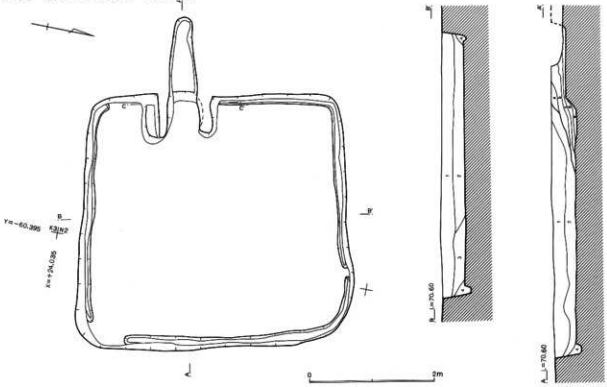
柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは遺存状態がよく北西壁南寄りに設置される。カマド壁は左袖部分で僅かに段差を持つ。

燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけて僅かに掘り込まれる。規模は0.81×0.52m、深さ0.40mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。

煙道部底面はほぼ平坦で、先端部へ向かって幅を減

第201図　第170号住居跡(2)・出土遺物



じる。規模は1.19×0.28～0.43mを測る。煙道部先端は攪乱を受けている。袖部は地山掘り残しである。

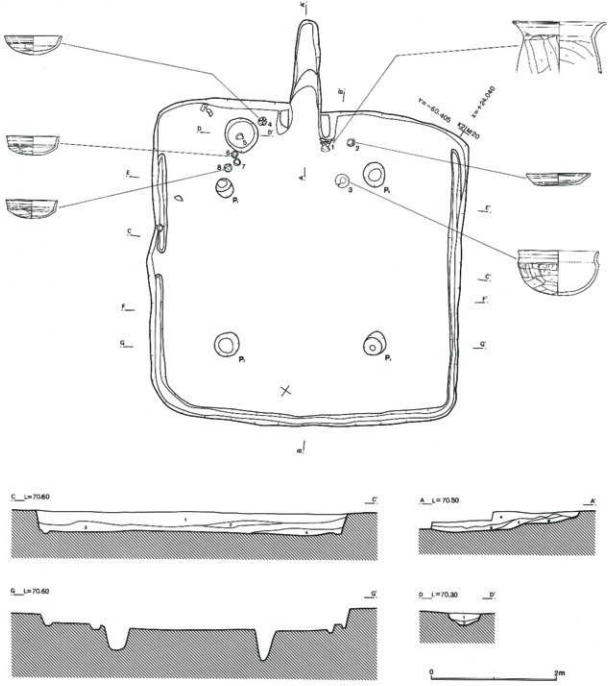
出土遺物は少なく、図示できるものは2点で全て埋土中の出土である。1は須恵器蓋で小破片の復元。2は粗製の鉢形土器と考えられ、口縁部が肥厚し、外面は体部篦削り後、口縁部下端部に指頭による押厚が加わる。

第171号住居跡（第202、203図）

本住居跡はK2M20グリッド付近に位置する。第173号住居跡の拡張住居で、カマド壁以外を拡張したものである。第9住居跡群の西側の小群に属する。

平面形はカマド壁が湾曲気味で、カマド左袖部分で段差を持つがほぼ方形。規模は5.20×5.04m、深さ34cmを測る。

第202図　第171号住居跡(1)



主軸方位はN－122°－Wを測る。

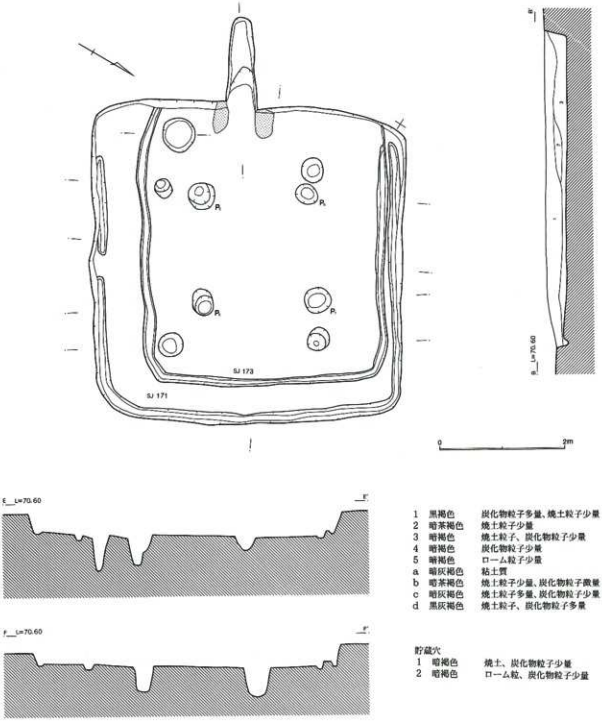
床面はほぼ平坦。拡張住居跡にもかかわらず貼り床は検出できなかった。掘り方は存在しない。

床面出土遺物は、カマド付近から貯蔵穴にかけて比較的集中している。

壁はやや傾斜気味である。壁溝はカマド壁及び南壁の一部を除いて設置される。

柱穴は4本でP1が小形(径26cm)、他の3本はやや大形で径34～38cmである。深さはP1が60cmと深く、他はP2が35cm、P3が50cmでやや浅い。

第203図　第171号住居跡(2)、第173号住居跡



柱穴配置はP4が外側にややずれる台形状で、柱穴間隔は、P1P2が2.58m、P2P3が2.32m、P3P4が2.79m、P1P4が2.44mを測る。

貯蔵穴はカマド左側の袖寄りに位置し、径51cmの円形で、深さ18cmと浅い。

カマドは南西壁やや南寄りに設置され、遺存状態は良好である。燃焼部は大形でカマド壁を大きく掘り込む。底面は平坦で、良く焼けている。規模は1.15×0.52m、深さ0.30mを測る。焼焼部奥壁から緩い段をなして煙道部へ移行する。煙道部は比較的短く、壁外に向かって緩く立ち上がる。規模は0.79×0.32mを測る。

袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。右袖は補強の長甕が出土している。

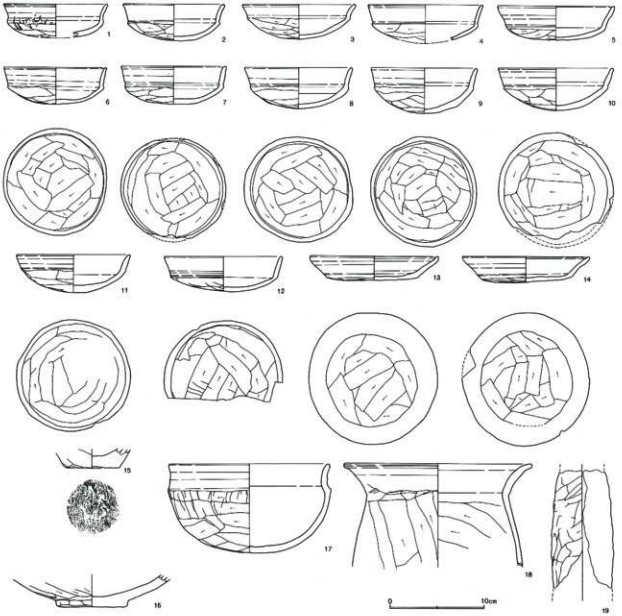
出土遺物は第173号住居跡との混在が顕著であるため、まとめて図示した。

第173号住居跡（第202、203図）

本住居跡はK2M20グリッド付近に位置する。

第171号住居跡内側の床面上で検出されたもので、同住居跡は、本住居跡のカマド壁以外を拡張したもの

第204図　第171・173号住居跡出土遺物



と考えられる。

平面形はカマド壁、南東壁が湾曲気味で、カマド左袖部分で段差を持つ長方形。規模は4.61×4.03mを測る。深さ、主軸方位は第171号住居跡と同一である。

床面は第171号住居跡とほぼ同一面で平坦である。貼り床、掘り方は存在しない。

壁はカマド壁以外は残存していない。やや幅広い壁溝がカマド壁を除いて設置される。

柱穴は4本でP8がやや小形(径30cm)、他の3本は径45cm前後でやや大形である。深さはP8が23cmとやや浅く、他はP5が52cm、P6が43cm、P7が47cmで深い。柱穴配置はP7が外側に僅かにずれるが、ほぼ方形をなし、内側に配置され壁と柱穴間はやや広い空間が存在する。柱穴間隔は、P5P6が2.58m、P6P7が2.32m、P7P8が2.79m、P5P8が2.44mを測る。

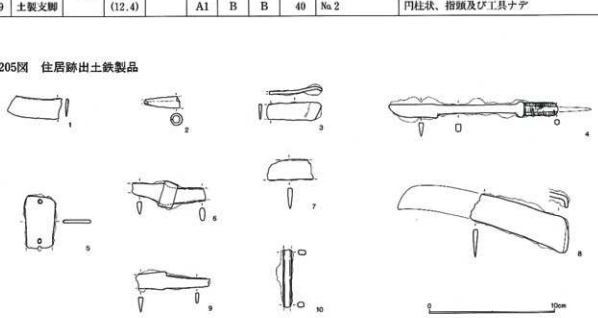
貯蔵穴は不明であるが第171号住居跡と重なっていた可能性が大きい。

カマドは第171号住居跡とほとんど同一位置に設置されていたものと考えられ、他の壁に痕跡をとどめていない。

第171・173号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	11.0	(3.5)		AE5	A	E	30	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+篦削り(未調合)
2	坏	10.8	3.9		A1	A	C	60	No.3	口縁外反、稜部工具ナデ+篦削り、摩滅顕著
3	坏	12.0	3.7		A1	A	B	25	カマド	口縁肥厚小さく外反、稜部ヨコナデ+篦削り
4	坏	12.0	(3.7)		A1	A	B	25	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+篦削り
5	坏	12.2	3.6		A1	A	B	40	埋土	口縁やや内湾、稜部ヨコナデ+篦削り
6	坏	10.9	3.9		A1	A	B	100	No.10	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+篦削り、黒斑
7	坏	11.2	4.0		A1	A	B	95	No.6	口唇肥厚、稜部工具ナデ+篦削り
8	坏	11.4	4.4		A1	A	B	99	No.9	口唇やや肥厚、稜部工具ナデ+篦削り
9	坏	11.2	4.8		A1	A	B	95	No.8	口縁ほぼ直立、稜部棒状工具+篦削り
10	坏	12.1	4.5		A1	A	B	80	No.5、SJ171、173と接合	口唇やや肥厚、稜部棒状工具+篦削り
11	坏	12.1	4.0		A1	A	C	90	No.4	口唇やや肥厚、稜部工具ナデ+篦削り
12	坏	12.5	3.6		A1	A	E	60	埋土	口唇内湾、稜部工具ナデ+篦削り、器肉薄い
13	皿	13.6	2.5	9.5	A1	A	C	99	No.2	口唇直立、底面篦削り、内面黒色
14	皿	13.5	2.7	9.5	A1	A	B	90	埋土	口唇直立、底面篦削り、内面黒色
15	甕底部		(2.1)	5.8	E5	B	F	80	埋土	やや上げ底、円環技法か?底面木葉痕
16	丸甕底部		(3.4)	7.4	E5	B	B	70	埋土	平底凸出篦削り、黒斑、器肉厚い
17	鉢	17.0	9.4		A1	A	B	90	No.3	砂質、段部ヨコナデ、稜部工具ナデ+篦削り
18	甕	20.0	(10.9)		E5	A	B	20	No.1	口縁外反、頸部斜め、縦篦削りによる段
19	土製支脚		(12.4)		A1	B	B	40	No.2	円柱状、指頭及び工具ナデ

第205図　住居跡出土鉄製品



住居跡出土鉄製品（第205図）

1は第1号住居跡出土で刃をもち、外反する。用途は不明だが、穂摘具の可能性がある。

2は第13号住居跡出土の筒状鉄製品。一枚の鉄板をまわして、円錐の筒状としている。用途不明。

3は第37号住居跡出土の板状鉄製品。刃をもち、端部が湾曲する。用途不明。

4は第4号住居跡出土で片刃箭式の長頸鏃。棘篦被をもつ。茎部に木質が残る。

5は第47号住居跡出土の板状鉄製品幅細の板状部分。3ヵ所に孔が確認された。用途不明。

6は第55号住居跡出土の刀子で刃～茎部の破片。研ぎ減りのためか刃関はない。鋲を装着する。

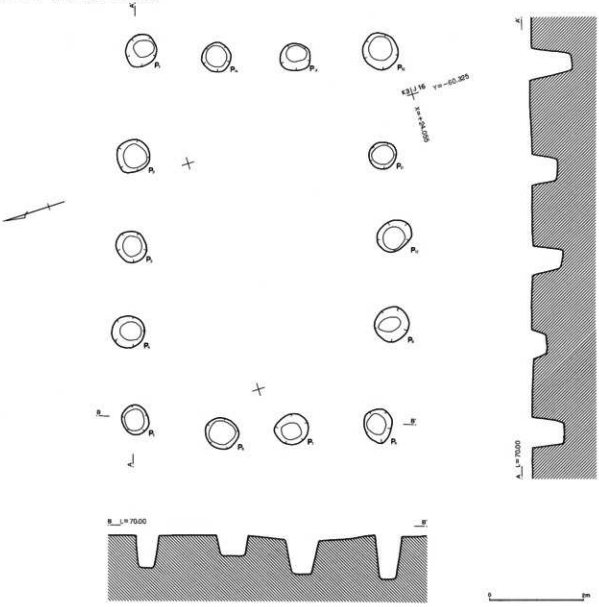
7は第59号住居跡出土。刃の破片で刀子の一部か。

8は第46号住居跡出土の鎌柄側の破片。柄の装着部分は浅く折れ曲がる。

9は第76号住居跡出土の刀子で刃～茎部の破片。両関で刃側は浅い。茎の先端に目釘孔あり。

10は第88号住居跡出土のやや稜をもつ棒状の鉄製品。用途不明。

第206図　第1号掘立柱建物跡



10．掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第206図）

K3I15～16グリッド付近に位置し、第１ピット群の東側に存在する。

新旧関係は、本掘立柱建物跡の南西隅が第31、32号住居跡を切って構築され、北西隅のP5が第33号住居跡カマド右袖下で検出された。

３間×４間で、規模は、桁行8.18m、梁行5.32mを測る。主軸方位はN－72°－Wを測る。

第１ピット群中に位置するため、北側を除いた周辺部は多数のピットが存在する。特に南側（P54・P68・P84・P86）と東側（P64・P77・P89）に存在するピットについては、当初本建物跡に伴うものと考えていたが、南側の４本については柱筋が通らないため本建物跡に伴わないものと判断した。

また東側については、精査にもかかわらず北端部に相当するものが検出できなかった。

柱穴は径60～80cmと大形のいずれも円形で、深さは40cm前後と比較的浅いものから90cm程の深いものまで幅がある。

柱穴間隔はP2P3、P2P4と対応する位置にあるP10P11、P9P10が1.85m程で、他が2.26mを測るのに対して幅狭い。同様にP6P7と対置するP12P13が、1.65m程で他の1.84mに対して幅狭くなっている。

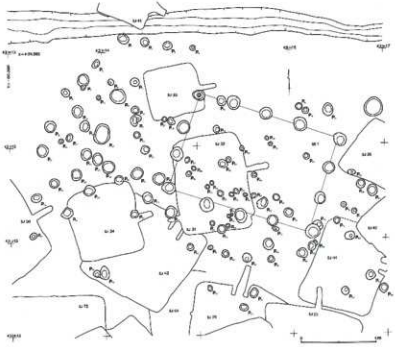
11．ピット群

第１ピット群（第207図）

K3H～I13～17グリッドに位置する。条里坪区画溝の南側、ほぼ第５住居跡群と重なる部分に展開するピット群である。

第32号住居跡と第34号住居跡との間に、大形のピットが比較的集中する。P1～P4、P5～P6・P25、P18・P28・P30・P40・P53・P54、p29・P36～P38、P80～P83・P85等は直線状に並ぶが、建物としての柱穴配置を把らえることはできなかった。時期決定し得る出土遺物に乏しいが、集落全体における位置と鬼高式土器以外出土していないことを考慮して、古墳時代後期としておく。

第207図　第１ピット群



12. 土　　壙

第１号土壙（第101図）

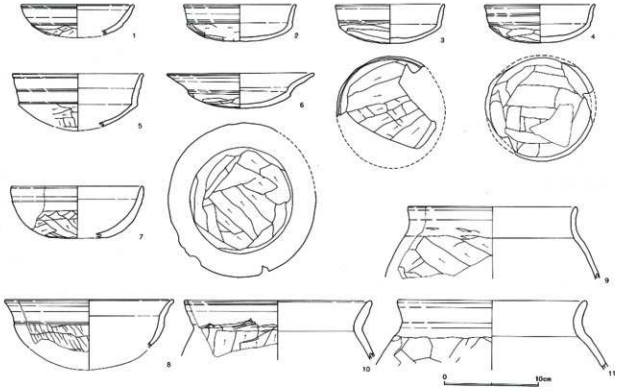
本土壙はK3K12グリッド付近に位置する。

新旧関係は、本土壙が第47号住居跡を切り、第48号住居跡によって切られる。

平面形は大形の楕円形状で、規模は2.62×2.58m、深さ32cmを測る。長軸方向はN－33°－Eを測る。

埋土上層から比較的多量の遺物が出土している。坏形土器が主体で、若干の甕形土器が加わる。

第208図　第１号土壙出土遺物



第１号土壙出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	(12.0)	(3.4)		A1	B	B	40	埋土	口唇肥厚稜部棒状工具＋箆削り二次加熱変色
2	坏	12.0	3.8		A1	A	B	40	埋土	口縁ほぼ直立、稜部棒状工具＋箆削り
3	坏	11.5	4.1		A1	A	B	40	埋土	口縁ヨコナデ、稜部ヨコナデ＋箆削り
4	坏	11.7	4.0		A1	A	A	90	No.4	口唇肥厚、稜部工具ナデ＋箆削り
5	坏	11.8	(3.2)		C1	A	B	20	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ＋箆削り、黒斑
6	坏	15.7	3.7		E2	A	A	90	No.4	口唇肥厚、稜部工具ナデ＋箆削り
7	坏	(13.8)	(5.6)		A1	A	F	20	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ＋箆削り
8	坏	(13.9)	(5.5)		A1	A	B	10	埋土	稜部ヨコナデ＋箆削り、器肉厚い、黒斑
9	坏	(18.0)	(5.1)		A1	A	C	10	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋箆削り
10	甕	(17.8)	(7.6)		CE2	A	E	20	埋土	口縁直立、頸部以下斜め箆削り
11	甕	(19.8)	(6.2)		E2	A	B	20	埋土	口縁肥厚、頸部以下縦箆削り
12	甕	20.0	(7.3)		E5	A	B	25	埋土	口縁肥厚、頸部段以下横箆削り

V　平安時代以降の遺構と遺物

概要

今年度報告の平安時代以降に属する遺構は、住居跡7軒、掘立柱建物跡2棟、土壙1基、堰跡1基、ピット群1カ所である。

第209図の遺構分布図には、条里坪跡の境界溝跡及び旧河川跡も図示してある。

これらのうち遺構に伴う出土遺物によって、確実に所属時期が把握できるものは少ない。すなわち第3、7号住居跡と堰跡のみで、その他の遺構については遺物が存在しないか、混入が顕著である。

ごく新しいと考えられる第1号堰跡と、遺物の出土していない掘立柱建物跡、ピット群、土壙を除外すると、非常に大まかに平安時代として把握される遺構は住居跡のみである。

第3号住居跡は出土須恵器から10世紀前半と考えられ、第7号住居跡は羽釜を伴う11世紀代と考えられる。他の住居跡については時期決定は困難であるが、あえて住居形態の類似性によって判断すれば、第3、11、155、169号住居跡が類似しており、9世紀代のものと考えられ、第7、18号住居跡が同様に11世紀代として把握できるかもしれない。

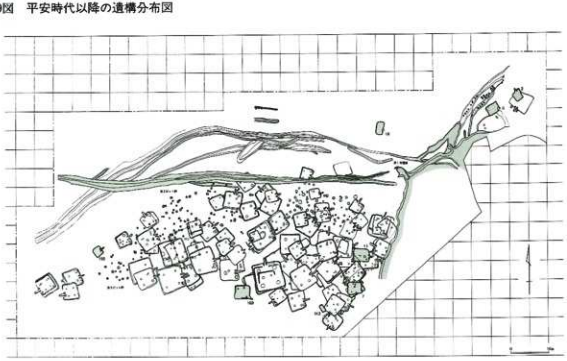
住居跡の時期決定と同時性に問題があるが、総じていえることは、自然堤防上の立地という点では変わらないが、古墳時代後期に比して集落規模の衰退が顕著であるという点である。住居跡が広い範囲に散在する集落構成である。

また鉄製品を出土した工房跡と考えられる住居跡が集落中に存在する点が注目される。

本年度の報告ではないが、自然堤防の北側で部分的に浅間B軽石直下の水田跡が検出されたこと、あるいは水田跡に伴うと考えられる溝跡が検出されたことは、集落との時期差があるとはいえ、さらに注目される点である。

中世以降については、確実な遺構は第1号堰跡である。この時期以降今井川越田遺跡は居住領域ではなくなっていると考えられる。すなわち確認された訳ではないが、前代までの居住領域は生産領域として水田化された可能性が強い。

第209図　平安時代以降の遺構分布図



1．住居跡

第２号住居跡（第210図）

本住居跡はK4C5グリッド付近に位置する。旧河川による攪乱が顕著で、比較的明瞭に検出されたのはカマド周辺部のみで、他の部分は不明確であった。住居形態から平安時代以後のものと判断される。断面観察によって第１、９、10号住居跡を切ることが明確に確認できたわけではない。

平面形はカマド壁が60cm前後の大きい段差をもつ、小形の長方形。規模は推定で2.52×3.00m、深さ50cm前後と考えられる。主軸方位はN－30°－Wである。

床面は全体に不明瞭で、かろうじてカマド前面に炭化物、焼土が分布するのみであった。硬質面は存在せず、貼り床も存在しない。

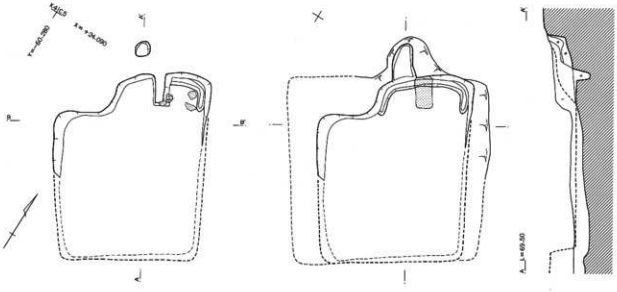
壁はカマド壁が残存するのみで、ほぼ直立し掘り込みはしっかりしている。壁溝はカマドから右袖部分にわたって検出されたが、幅広く深い。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

掘り方は不明であるが、壁外に広がる黒色土の分布が確認されており、推定部分も含めて図示した。

カマドは北西壁ほぼ中央部に設置される。燃焼部の規模は0.60×0.50m、深さ34cmを測る。煙道部へわずかな段をなして移行する。煙道部は短く、規模は0.53×0.39mを測る。煙出し口は略円形（径25cm）の焼土範囲として良好に遺存していた。右袖部は灰褐色粘土によって構築され、左袖は段状の壁を利用する。

供伴遺物はなく、甕底部は混入と考えられる。

第210図　第２号住居跡・出土遺物


K4C5
Y=40,280
X=-24,000
R
S
A
A'
A'
A
R'
S'
A'
A
A'
A
R'
S'
R'
S'
R'
S'

第3号住居跡（第211図）

本住居跡はK4D4グリッド付近に位置する。南側は旧河川による攪乱を受ける。第4号住居跡を切る。

平面形は北東壁がやや斜行する小形の長方形で、規模は3.46×2.70m、深さ37cmを測る。

住居跡の長軸方向はN−56.5°−Eである。

床面は地山直上に構築され全体に不明瞭で、硬質面は存在せず、貼り床も存在しない。炭化物及び炭化材が、西壁下中央部の床面直上で出土している。

壁は比較的西壁の遺存状態が良い他は不良である。全体に緩く傾斜している。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

掘り方は存在しない。

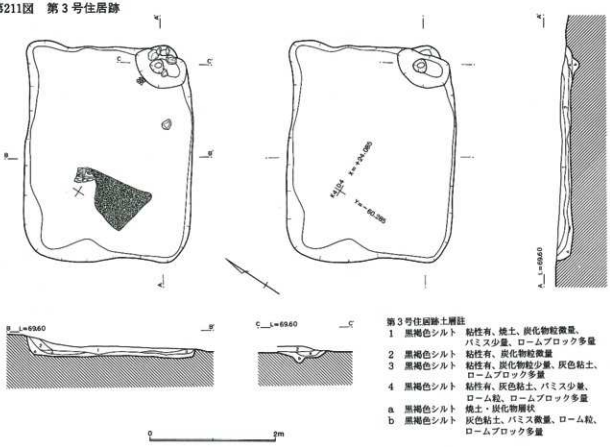
カマドは攪乱顕著でほとんど崩壊しているが、住居跡の東隅部分に設置される。

燃焼部は長楕円形で、規模は0.89×0.50m、深さ20cmを測る。中央部からやや左寄りに支脚穴が径20cm、深さ12cmの小ピットが存在する。煙道部の残存部分か半円状に15cm程凸出している。

袖部は検出されなかったが、補強材と考えられる河原石がピットを囲むように（0.46×0.44mの範囲）検出された。

出土遺物は少量で、1の坏形土器は混入、2〜3が供伴すると考えられる。

第211図　第3号住居跡



第212図　第3号住居跡出土遺物

第３号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　　考
1	坏	12.0	(4.9)		A1	A	B	25	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り、黒斑
2	須恵坏	11.2	4.1	5.2	A5	A	H	80	カマド	ロクロ左？回転、炭化物付着、摩滅顕著
3	小形台付甕		3.6		AC2	A	A	50	埋土	底部に脚貼付け
4	甕	20.0	(7.3)		CI	A	A	10	カマド	コ字状口縁、頸部横篦削り

第７号住居跡（第213図）

本住居跡はK4N17グリッド付近に位置する。第11号住居跡の南側約15mほどに存在する。

本住居跡は多量の焼土、炭化材の出土にもかかわらず、カマドが検出されないため平安時代以後のものと考えられる。

平面形は東西方向に長軸をもつ小形の長方形で、規模は3.84×3.40m、深さ13cmを測る。

住居跡の長軸方向はN－86.5°－Eである。

床面は地山直上に構築され全体に不明瞭で、硬質面は存在せず、貼り床も存在しない。

中央部の床面直上では焼土が比較的集中して出土した。また炭化物及び炭化材が、主に北東～南西隅の対角線上の床面直上で出土しているが、住居跡の壁外にも分布が認められた。

壁は全体に掘り込みが浅く、遺存状態は不良である。

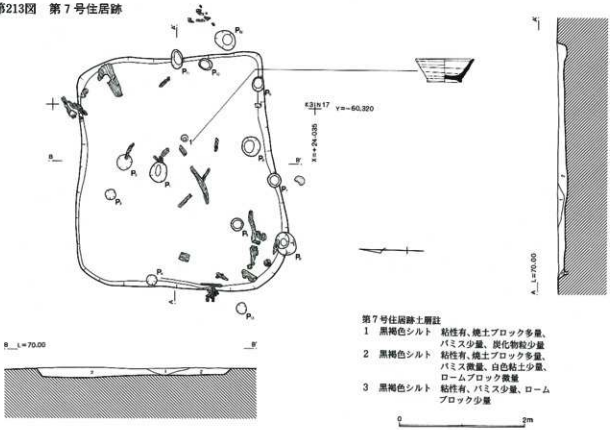
柱穴は13本と多数検出されている。壁柱穴と考えられるものを含めて、長軸方向に並ぶものが多いが、概して整った配置を示さない。径は20～30cmで、深さは一定しない。

カマド及び壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

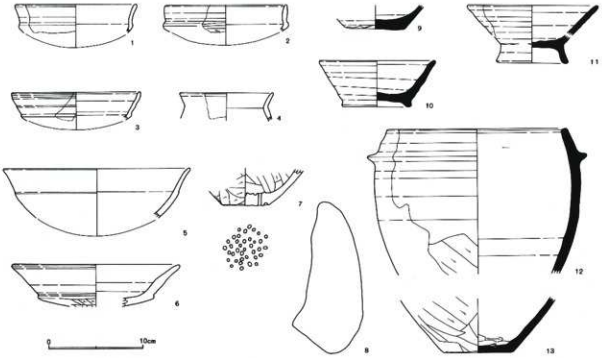
掘り方は存在しない。

出土遺物は少量で、１～８は重複する住居跡からの混入である。９～13が供伴遺物と考えられる。

第213図　第７号住居跡



第214図　第７号住居跡出土遺物



第７号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	13.0	(3.0)		A1	A	C	20	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り
2	坏	13.0	(4.0)		A1	A	F	10	埋土	稜部ヨコナデ＋篦削り、内面黒色
3	坏	13.8	(3.8)		C1	B	F	10	埋土	段部ヨコナデ稜部ヨコナデ＋篦削り内面黒色
4	椀	10.0	(3.0)		A1	B	A	10	埋土	風化摩滅顕著
5	坏	20.0	(5.2)		A1	A	C	10	埋土	稜部はヨコナデ＋篦削り、摩滅顕著
6	高坏	17.9	(4.5)		C1	A	D	20	埋土	稜部棒状工具＋篦削り、器肉厚い
7	甑底部		(4.0)	5.2	AE2	A	A	60	埋土	小穴多孔、器肉厚い、黒斑
9	須恵坏		2.6	6.4	C1	A	E	60	埋土	底面糸切り痕、円柱状法か？
10	須恵高台坏	12.1	4.8		E5	A	H	100	No.1	ロクロ右回転、外面炭化物付着
11	須恵高台坏		3.0	7.6	D2	A	H	20	埋土	ロクロ右？回転、高台やや高い
12	羽釜	19.0	(15.3)		E2	A	H	20	埋土	ロクロ右回転、下半部ナデ
13	羽釜底部		(5.8)	7.2	A2	A	H	60	埋土	ロクロ右？回転、外面～底部篦削り

第11号住居跡（第215図）

本住居跡はK3L17グリッド付近に位置する。第７号住居跡の北側に存在する。遺構確認面で耕作による撹乱が及んでいたが、住居跡全体を覆う浅間Ｂ軽石層（一点鎖線の範囲）が検出された。

平面形はカマド壁が歪むが略長方形で、規模は4.22×3.48m、深さ26cmを測る。住居跡の長軸方向はN－93°－Eである。

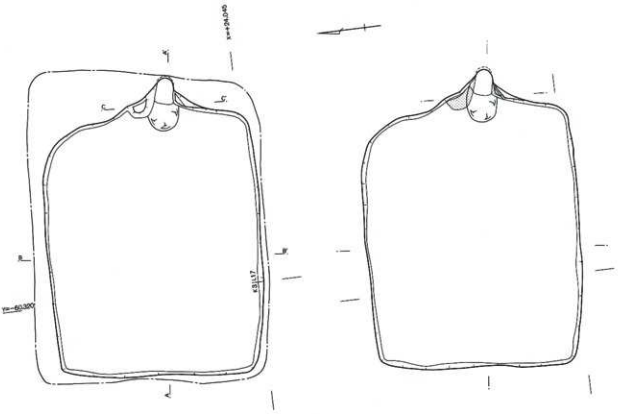
床面は地山直上に構築され、貼り床は存在しない。

壁はやや傾斜するが掘り込みはしっかりしている。壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。掘り方は存在しない。

カマドは方位がN－98.5°－Eで住居跡長軸とややずれる。東壁やや南寄りに設置され、燃焼部の遺存状態は良好。規模は0.68×0.48m、深さ48cmを測る。袖は両壁を一部利用するもので灰褐色粘土により構築される。

出土遺物は少量で、１～６は重複する古墳時代住居跡からの混入である。７の須恵器坏の小破片が供伴遺物と考えられる。

第215図　第11号住居跡

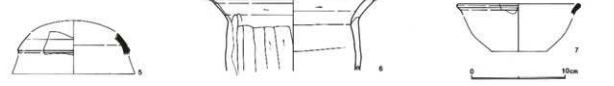


a　褐色シルト　　粘性有、崩落焼土ブロック大量
b　黒褐色シルト　粘性強、焼土粒微量、ロームブロック少量
c　黒褐色シルト　粘性強、炭化物多量
d　褐色シルト　　細粒砂層、焼土粒、焼土ブロック少量、ロームブロック微量

第１１号住居跡土層註
1　灰褐色シルト　粘性有、粗～中粒スコリア(天仁) 大量、焼土ブロック、ロームブロック
2　黒色スコリア　中粒砂多量
3　灰褐色シルト　粘性強、焼土ブロック少量、パミス微量、ローム粒微量
4　黒褐色シルト　粘性有、焼土ブロック少量、パミス少量、ロームブロック少量
5　黒褐色シルト　粘性有、焼土ブロック少量、パミス微量、ロームブロック少量

0　2m

第216図　第11号住居跡出土遺物



第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	高坏		(5.6)		AD1	B	E	70	埋土	内外面篦削り
2	坏	12.0	(3.6)		A2	A	E	20	埋土	口縁外反、稜部棒状工具＋篦削り
3	坏	12.0	(2.3)		C1	B	A	10	埋土	口縁内傾、稜部棒状工具？＋篦削り
4	甑	17.6	(5.2)		A2	A	B	10	埋土	口縁外傾、外面篦削り、内面平滑黒斑
5	須恵壺		(2.2)		D1	A	H	10	埋土	ロクロ左回転
6	甕	18.7	(8.3)		AE5	A	A	20	埋土	口縁外反、頸部以下縦篦削り
7	須恵坏		(1.3)		D1	A	H	10	埋土	口唇肥厚

第18号住居跡（第217図）

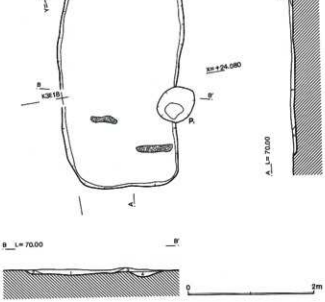
本住居跡は K3E18 グリッド付近に位置する。条里坪境界溝の北側にあり、周辺部に住居跡は存在しない。

平面形は北半部が歪むが略長方形で、規模は3.46×2.15m、深さ10cm前後である。住居跡の長軸方向は N－6°－E である。

床面は地山直上に構築され、硬質面はなく全体に柔らかい。壁はやや傾斜する。壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

東壁やや南寄りに円形（径58cm）の落ち込みが検出された。前面に若干焼土が分布し、カマド燃焼部の可能性があるがほとんど焼けていない。出土遺物はない。

第217図　第18号住居跡



第１８号住居跡土層註
1　黒褐色シルト　砂質、細粒砂、パミス少量
2　暗褐色シルト　粘性有、ローム粒、ロームブロック少量
3　暗褐色シルト　粘性有、パミス少量、ローム粒、ロームブロック多量
4　黒褐色シルト　粘性有、焼土ブロック多量、パミス微量

第155号住居跡（第218図）

本住居跡は K3K3 グリッド付近に位置する。

古墳時代住居跡群のほぼ中間に位置し、周辺部に遺構は希薄で単独で存在する。出土遺物は図示した２点のみで、いずれも埋土中の出土である。住居形態を考慮すると本住居跡は平安時代以後のものとするのが妥当である。

平面形は小形の方形で、規模は2.43×2.34m、深さ20cmを測る。主軸方位は N－55.5°－E を測る。

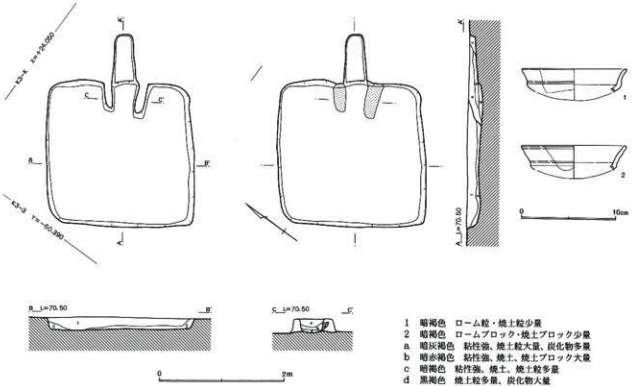
床面は平坦で全体に柔らかく、貼り床は存在しない。

壁はやや傾斜するが掘り込みはしっかりしている。

壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出されず、掘り方は存在しない。

カマドは東壁ほぼ中央部に設置される。燃焼部底面ほぼ平坦でほとんど焼けていない。規模は0.58×0.36m、深さ0.21mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。煙道部は壁外に向かって緩く立ち上がる。規模は0.73×0.30mを測る。袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁はほとんど掘り込まれず、明瞭な掘り方は存在しない。

第218図　第155号住居跡・出土遺物



1　暗褐色　ローム粒・焼土粒少量
2　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
a　暗灰褐色　粘性強、焼土粒大量、炭化物多量
b　暗赤褐色　粘性強、焼土、焼土ブロック大量
c　暗褐色　粘性強、焼土、焼土粒多量
d　黒褐色　焼土粒多量、炭化物大量

第155号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	(11.1)	(2.5)		AE1	A	C	20	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ＋篦削り
2	坏	(11.1)	(2.6)		A1	A	C	10	埋土	口唇肥厚、稜部工具ナデ＋篦削り

第169号住居跡（第195、219図）

本住居跡はK3N11グリッド付近に位置する。新旧関係は、本住居跡が周辺部の住居跡を全て切っており最も新しい。住居形態から平安時代以後と考えられ第2、3号住居跡、第11号住居跡、本住居跡、155号住居跡はほぼ等間隔である。

中央部埋土中から床面にかけて多量の焼土が出土し、北東隅付近からは床面乃至若干浮いた状態で大形の河原石が検出されている。鉄製品の出土を考慮すると本住居跡は工房跡の可能性が強い。

平面形は東西方向に長軸をもつ略平行四辺形状で、北東隅の湾曲が顕著である。規模は4.09×3.84m、深さ28cmを測る。

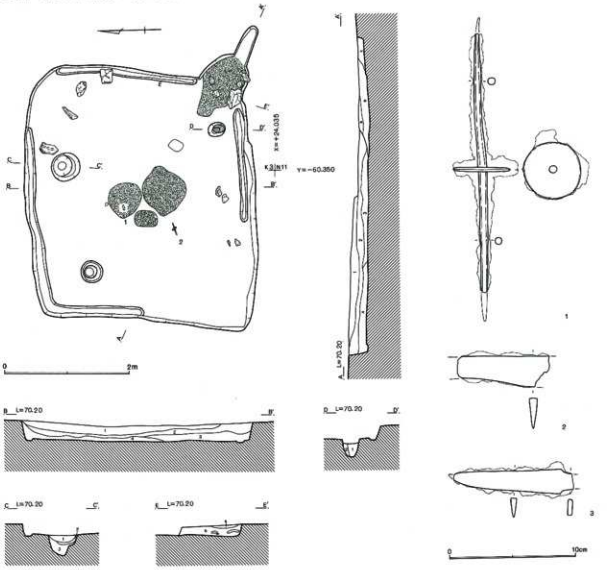
住居跡の長軸方向はN－87.5°－Eを測る。

床はほぼ平坦で、地山直上に構築される。貼り床は存在しない。壁はやや傾斜するが掘り込みはしっかりしている。壁溝はカマド部分、北東隅、南西部分を除いて設置される。全体にやや幅広く、掘り込みは浅い。

柱穴はP2とP3の2本と考えられる。P1は工房関連のピットと考えられる。P3はカマドに接近し過ぎているが、柱痕跡（径16cm）が検出されている。P2は2段に掘り込まれ、外径35cm、内径21cm。P3が径26cm。いずれも深さは30cm前後でやや浅い。柱穴間隔はP2P3が3.08mを測る。P1は南側に若干の平坦面を作り出す、外径47cm、内径30cmの円形ピットである。P1P2は1.77m、P1P3が2.57mを測る。

カマドは南東隅に設置される。カマド軸方向はN－118.5°－Eを測る。燃焼部は壁外を対角線上に大きく掘り込む。底面はほぼ平坦で良く焼けている。規模は0.72×0.72m、深さ0.18mを測る。燃焼部奥壁から緩い段をなして煙道部へ移行する。煙道部底面はほぼ平坦。規模は0.63×0.26mを測る。袖部ほとんど崩壊し

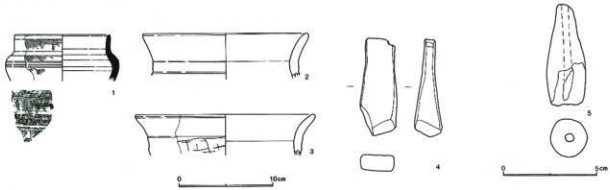
第219図　第169号住居跡・出土遺物



1　黒褐色シルト　ローム・炭化物少量
2　暗褐色シルト　ローム粒多量、焼土粒子微量
3　暗褐色シルト　ローム少量、焼土粒子微量
4　暗褐色シルト　ローム、ローム粒、焼土粒子微量
a　暗褐色シルト　焼土ブロック微量、炭化物少量
b　黒褐色シルト　ローム・焼土ブロック多量、炭化物微量
c　暗褐色シルト　ローム多量、炭化物少量

貯蔵穴
1　黒褐色シルト　炭化物粒子少量
2　暗褐色シルト　焼土粒子少量
3　暗褐色シルト　焼土粒子、炭化物粒子少量

柱穴
1　暗灰色シルト　　粘土質、ロームブロック多量
2　暗黄灰色シルト　粘性強、ロームブロック少量



ているが、右軸部分には大形の片岩が検出された。

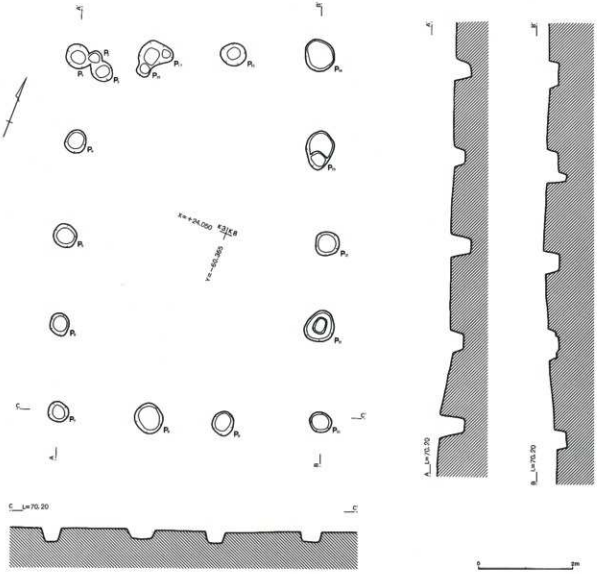
出土遺物のうち土師器、須恵器、土錘、砥石は重複する住居跡からの混入と考えられる。供伴する遺物は鉄製品3点のみである。1は紡錘車で、軸の両端を欠くがほぼ完形である。2は刀子で、茎部の大部分と切先先端を欠く。関は両関でほぼ均等である。3は刀子で関に近い刃先の破片。研ぎ減りのため身幅を減ずる。

第169号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵壺	(10.0)	(5.0)		D1	A	H	10	埋土	ロクロ右回転
2	甕	17.4	(4.8)		E2	A	E	10	埋土	器肉厚い、頸部工具による段、混入か？
3	甕	(19.0)	(4.3)		E2	A	E	10	埋土	口縁やや外反、頸部縦篦削り、混入か？
4	砥石	10.4×4.0(cm)								
5	土錘	長径(5.3)×最大径1.95×孔径0.45(cm)、重量15g								

2．掘立柱建物跡

第220図　第2号掘立柱建物跡



第２号掘立柱建物跡（第220図）

K3K8グリッド周辺部に位置し、第２ピット群のほぼ中央部に存在する。

新旧関係は、本掘立柱建物跡が重複する鬼高期の全ての住居跡を切って構築されている。

３間×４間で西側桁行が僅かに斜行する。規模は、桁行7.76m、梁行5.66mを測る。主軸方位はN－72°－Wを測る。

北西隅は３本の柱穴が重複しているが、断面観察では新旧関係は把握できなかった。

東側のP11～P14及びP8は大形で、径70cm前後の円形乃至楕円形の柱穴である。他は径40cm前後の円形の柱穴である。柱間隔はやや狭く、ばらつきがある。平均1.6～1.8m前後を測る。

第３号掘立柱建物跡（第221図）

K3M4グリッド付近に位置し、第97、98号住居跡の西側、第155号住居跡の南側に存り、３軒に囲まれたような外観を呈する。

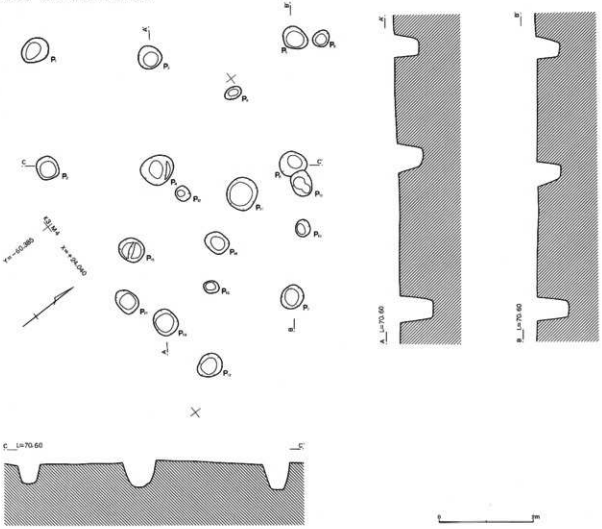
出土遺物がなく時期決定は難しいが、埋土の様相と全て小形の柱穴であることから古墳時代以後と判断した。

当初北東側に存在する多数の柱穴も伴うと考えていたが、柱通りが整然としないため、P1～P6によって構築される、１間×２間の建物と判断した。

規模は、桁行5.40m、梁行2.6mを測る。主軸方位はN－40°－Wを測る。

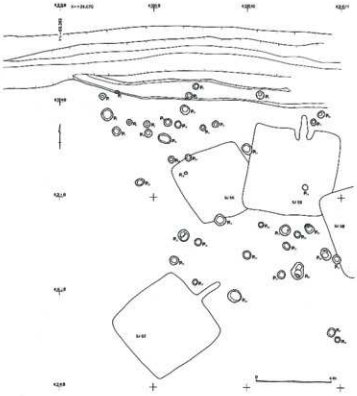
柱間隔はP1P3、P2P4が2.4m程でやや狭い。柱穴は径50cm程の円形乃至楕円形である。

第221図　第３号掘立柱建物跡



3．ピット群

第222図　第２ピット群(1)



第２ピット群（第222、223図）

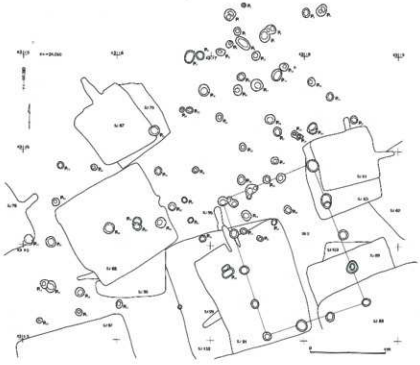
K3H～K8グリッドからK3I～L9グリッドの範囲、すなわち概ね第59号住居跡周辺から第61号住居跡、第67号住居跡周辺部によって囲まれた範囲に存在するピット群を、第２ピット群と呼称する。

各ピット内からの出土遺物は皆無であるが、埋土の様相は灰褐色土を主体とするものが多く、古墳時代の住居跡と重複する場合、全ての住居跡をピットが切っている。正確には時期不詳であるが、平安時代以降として扱っておく。

本ピット群は大略東、西の２地点に分かれる。

P33～P36・P38、P33・P40・P51・P57、P60～P62等直線状に並ぶものはが存在するが、建物として把握されるものはない。径は比較的小形のものが多い。

第223図　第２ピット群(2)



4．土壙・堰跡

第３号土壙（第224図）

本土壙はK3O15グリッド付近に位置する。

第５号住居跡のカマド壁、南西隅部分を切って構築される。

平面形は長方形で、規模は1.50×0.78m、深さ20cmを測る。

断面形態は箱形状をなし、底面はほぼ平坦、壁はわずかに傾斜するが掘り込みはしっかりしている。

出土遺物はないが、埋土の様相から平安時代以降と判断した。

第１号堰跡（第224図）

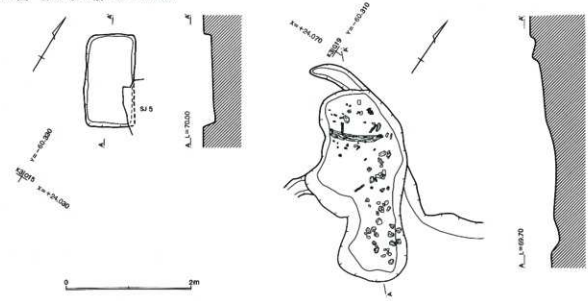
本堰跡はK3G19グリッドに位置する。

東西方向に走行する条里坪境界溝に平行する、ごく新しい時期の溝に伴う施設と考えられる。

平面形は長楕円形乃至長方形で、規模は3.10×1.35m、深さ15～30cmを測る。長軸方向はN－44°－Wを測る。

底面から若干浮いた状態で小石が多量に出土している。また図示していないが、近世と考えられる陶磁器が上層から比較的多量に出土している。

第224図　第３号土壙・第１号堰跡



５．グリッド・表採遺物

グリッド・表採遺物の出土位置で比較的多いのは、第24号住居跡周辺部と、第74号住居跡周辺部である。両地点とも、黒色土が広範囲にわたって分布しており遺構の検出が困難であったためと考えられる。

比較的遺存状態の良好なもの、特徴的なものを図示した。

坏形土器、大形の坏形土器、椀形土器、甕形土器、甑形土器、ミニチュア土器等がある。

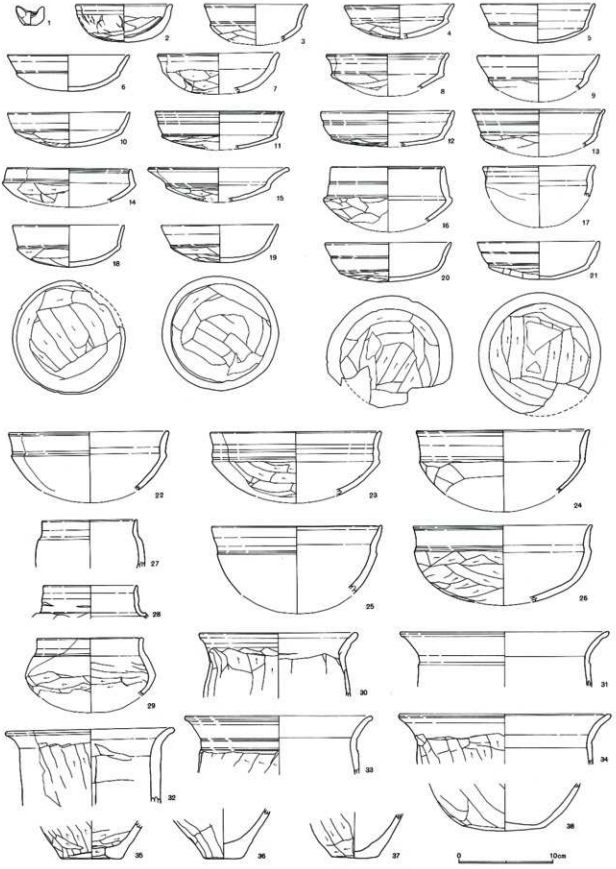
坏形土器は口縁部が外反するもの、有段口縁のもの、口縁部が小さく内傾するものがある。器肉がごく厚い7や口縁部が大きく開き皿状を呈する15のような坏形土器も存在する。口径に大、小があり時期差がある。

甕形土器は胴部が張りを持ち口縁部が「く」字状に開くものは少量で、胴部が張りを持たず頸部が屈曲気味の段をなすもの、頸部が縦篦削りによる段をなすものが比較的多い。

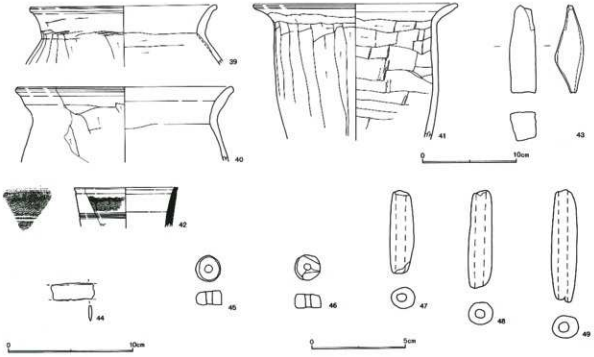
グリッド・表採遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	手づくね	2.8	2.0	1.4	E2	A	E	90	K3L13	器肉厚い
2	坏	10.0	4.0		AE1	A	B	60	K3N12	口縁内湾、体部指頭ナデ、篦削り、器肉厚い
3	坏	11.0	(3.9)		A1	A	B	20	K3N12	口唇肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
4	坏	11.6	(3.6)		A1	A	E	50	K3N12	口唇やや肥厚、稜部棒状工具＋篦削り
5	坏	12.2	4.1		A1	A	B	50	K3L16	段部ヨコナデ、稜部棒状工具＋篦削り
6	坏	13.0	3.8		A1	A	C	30	K3N12	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ＋篦削り
7	坏	(12.8)	(4.1)		AD2	A	A	25	K3N12	稜部ヨコナデ＋篦削り、器肉厚い

第225図　グリッド・表採遺物(1)



第226図　グリッド・表採遺物(2)



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
8	坏	(12.8)	(3.7)		A2	A	C	25	K3L16	口唇内湾、稜部工具ナデ＋篦削り、器肉厚い
9	坏	12.8	(3.7)		A1	A	B	30	K3L16	口縁内湾、稜部ヨコナデ＋篦削り、器肉厚い
10	坏	12.9	3.5		A1	A	B	30	K3N12	段部ヨコナデ、稜部棒状工具＋篦削り、黒斑
11	坏	13.7	(4.0)		AC1	A	B	50	K3L16	段部棒状工具、稜部棒状工具＋篦削り
12	坏	14.0	(3.7)		C1	A	E	30	K3L16	段部棒状工具、稜部棒状工具＋篦削り
13	坏	14.0	(4.0)		C1	A	F	20	K3L16	口唇沈線、段部沈線稜部棒状工具＋篦削り
14	坏	(13.0)	(3.5)		DE2	A	B	10	K3L5	口唇回線口縁内傾肥厚稜部工具ナデ＋篦削り
15	坏	(14.6)	(3.6)		C1	A	A	10	K3N12	口唇肥厚、稜部棒状工具＋篦削り
16	坏	12.0	(5.8)		C1	A	F	30	K3L16	口唇沈線段部沈線、稜部工具ナデ＋篦削り
17	坏	(12.0)	(3.4)		E1	A	E	20	K3L12	口縁外反肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
18	坏	11.7	4.4		A4	A	B	90	K3L16	稜部棒状工具＋篦削り
19	坏	12.3	4.0		A1	A	B	90	K3L16	段部ヨコナデ、稜部棒状工具＋篦削り
20	坏	13.3	4.1		C1	A	E	80	K3N12	段部棒状工具、稜部棒状工具＋篦削り、黒斑
21	坏	13.0	4.0		C1	A	E	90	K3N12	段部棒状工具稜部棒状工具＋篦削り、炭化物
22	坏	(16.8)	(6.2)		E2	A	C	10	K3L11	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ＋篦削り
23	坏	(18.0)	(6.8)		C1	A	F	20	K3L16	段部工具ナデ、稜部工具ナデ＋篦削り
24	坏	18.5	(6.7)		A1	A	C	60	K3N12	口縁肥厚、稜部工具ナデ＋篦削り
25	坏	18.0	(7.2)		A1	A	C	10	K3L16	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ＋篦削り
26	坏	19.0	(8.0)		A1	A	B	25	K3N12	口縁やや肥厚、稜部工具ナデ＋篦削り
27	椀	10.0	(5.1)		AE2	A	C	20	K3L5	口縁直立、稜部ヨコナデ＋篦削り、器肉厚い
28	椀	9.8	(3.5)		AE2	A	C	30	K3L16	口縁直立肥厚、段部ヨコナデ＋横篦削り
29	椀	(11.0)	(6.2)		DE2	A	B	30	K3L16	口縁直立肥厚、頸部ヨコナデ＋横篦削り
30	甕	16.8	(6.8)		E5	A	B	50	K3L16	口唇直立口縁肥厚、頸部以下縦篦削り
31	甕	22.0	(5.8)		E1	A	B	20	K3N12	口縁外反、頸部段以下縦篦削り
32	甕	(17.8)	(7.9)		AE2	A	B	10	K3N12	口縁小さく外反頸部以下縦篦削り、器肉厚い
33	甕	19.8	(6.2)		E2	A	B	30	K3N12	口縁外反、頸部段以下斜め篦削り
34	甕	22.3	(5.3)		CE2	A	E	25	K3L16	口縁外反、頸部以下縦篦削り
35	甑底部		(4.0)	6.4	E2	A	E	50	K3L16	小形単孔、外面縦篦削り、器肉厚い
36	甕底部		(5.3)	4.2	E5	A	B	60	K3L16	平底凸出、外面縦篦削り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
37	甕底部		(4.8)	5.0	E5	B	F	60	K3L16	平底篦削り、外面縦篦削り
38	甕底部		(5.0)	9.0	C1	A	E	60	K3N12	平底篦削り、外面縦篦削り、器肉薄い
39	甕	19.6	(6.4)		E5	A	B	40	K3N12	口唇肥厚、口縁外反、頸部以下縦篦削り
40	甕	(23.0)	(7.9)		E2	A	E	10	K3N12	口縁外反、頸部以下縦篦削り
41	甕	21.9	(14.4)		CE2	A	B	50	K3N12	口縁外反、頸部以下縦篦削り
42	須恵鉢	(11.0)	(4.2)		F1	A	H	20	K3L12	ロクロ右？回転、口唇沈線
43	砥石	(9.8)(長径)×3.0(幅) 13.9g								
44	刀子	K3I13、刃の破片。背は丸味を帯びる								
45	臼玉	K3N14、上径1.1×下径1.3×孔径0.35×厚さ0.7(cm)、重量2.1g								
46	臼玉	K3N16、上径1.2×下径1.35×孔径0.35×厚さ0.7(cm)、重量1.7g								
47	土錘	K3N11、長径4.35×最大径1.2×孔径0.5(cm)、重量4.2g								
48	土錘	K3N15、長径5.0×最大径1.25×孔径0.5(cm)、重量6.6g								
49	土錘	K3N14、長径6.0×最大径1.3×孔径0.35(cm)、重量7.4g								

▲遺跡遠景

V まとめ

今年度報告範囲は住居跡と竪穴状遺構119軒（今井川越田遺跡住居跡一覧表）と掘立柱建物跡、土壙及び出土遺物等に限られ、遺跡全体の遺構数の約1/3にすぎない。したがって今井川越田遺跡の全体像は、次年度以降の整理報告をまって把握するべきであろう。以下では調査及び整理の結果認識された、2、3の問題点について若干の指摘をするにとどめておく。また本遺跡の主体を占める遺構、遺物は、古墳時代後期の鬼高式期に属するため、同時期に限ることにする。

今井川越田遺跡の出土土器で最も注目されるのは、鬼高式期でも新しい段階に属すると考えられる土器群が比較的多量に出土した点である。

第48、74、87号住居跡出土土器は、この時期の特徴をよく備えている。

第87号住居跡で多量に出土した坏形土器（第145図5～16）は、口径が11.0～12.0cm前後で小形のもので、口縁部は小さく直立ないし外反する。稜部は痕跡的で、成形手法は、口縁部の横撫でと体部篦削りによって造出されるものが主体をなす。また体部外面の稜直下に未調整部分を残すもの（同図13～16）が少数存在している。全体に輪積みによるためか器厚は厚いものが主体をなすが、薄いものもありこの場合体部内面に指頭押圧痕が残存している（同図5、6）。

甕形土器は比較的少なく好例に恵まれないが、概して胴部最大径は口径よりも小さい。く字状口縁の痕跡とされる、頸部の屈曲あるいは僅かな段を持つものはやや少なく、全体に器壁が薄く頸部～口縁にかけて、外面篦削りによる段を残すものが主体となるようである。胴部外面は縦篦削りの他、頸部付近に斜め篦削りが施されるもの（第102図20、21）が出土している。

以上のほか坏形土器には皿状を呈するものや、やや大形で口縁部が小さく直立乃至、外反するもの（第102図15、16）が組成化している。

これらの土器群は周辺遺跡と対比すると、南大通り線内遺跡（増田1987a、1989a）、社具路遺跡（長谷川1987）、下田遺跡（柿沼1979、増田1990）古川端遺跡（小久保1978）、若宮台遺跡（大和1983）、天神林遺跡・高野谷戸遺跡（大和1985）、村後遺跡（細田1984）等の住居跡出土遺物に類例があり、特に古川端遺跡第10号住居跡出土土器とほぼ同段階と考えられる。

第33、44号住居跡では口縁部が小さく直立ないし内湾気味に立ち上がる坏（第83図9～11）が出土している。今井G2号住居跡（富田・赤熊1985）で多量に出土している坏形土器とほぼ同一の坏形土器と考えられるが、本遺跡では少量に留まるようである。

本遺跡では住居跡から比較的須恵器が出土しているが、宝珠摘みを持つ須恵器蓋は、第19号住居跡出土の須恵器三足壺蓋とされるもの（嶋田1993）のみである。

その他出土土器で注目される点は、比企型坏に関しては第88号住居跡から1点出土したのみである。また内面が黒色処理された、小形で口縁部が大きく開き体部が浅い坏形土器は、温井遺跡（真下1981）等に類例があるが、比較的数量は多く第4、19、56、88号住居跡等で出土している。第17号住居跡からは、胎土、色調ともに他の土器とは異質で、口唇部が屈曲し内面に刷毛目を残す甕形土器の口縁部が出土しており駿東地方に分布する甕形土器に近似している。また粗製の坏形土器の出土も比較的多い。その他の器種では、ミニチュア土器乃至手づくね土器の存在が注目される。

土器以外の出土遺物で注目されるのは、所謂編物石と貝果穴痕泥岩の存在がある。

胎土分析については、今井川越田遺跡固有の胎土を確定すべく、坏形土器と土製支脚の分析を行った。隣接する川越田遺跡、梅沢遺跡出土遺物も加えてある。次年度以降予定されている分析や他遺跡も考慮しさらに検討すべきであろう。

遺構についての最大の成果は、該期の集落の大部分が調査された点である。次年度以降の遺物、遺構等の分析によって、構造と動態及び集落間の交通諸関係が解明されるものと期待される。

引用・参考文献

赤熊浩一　1988　『将監塚　古井戸ー古墳・歴史時代Ⅱー』　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

飯塚　誠　1993　『少林山古遺跡ー後期弥生時代集落・群集墳の調査ー』　少林山砂防施設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

井上尚明　1986　『将監塚・古井戸ー古墳・歴史時代Ⅰー』　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

及川　司　1988　『群馬県　滝前・滝下遺跡発掘調査報告書』　滝前・滝下遺跡調査会ほか

柿沼幹夫　1979　『下田・諏訪』　上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告　埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集　埼玉県教育委員会

恋河内昭彦1991　『真続寺後遺跡Ⅲ―Ｃ・Ｆ・Ｄ地点の調査―　児玉町文化財調査報告書　第14集　児玉町教育委員会

恋河内昭彦1993　『川越田遺跡Ⅱ』（Ｂ・Ｃ地点の調査）　児玉町遺跡調査会報告書　第５集　児玉町遺跡調査会

小久保徹1978　『東谷・前山２号墳・古川端』　上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ　埼玉県遺跡発掘調査報告書第　16集　埼玉県教育委員会

小久保徹・駒宮史朗　1983　『天神林・高野谷戸』　上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

駒宮史朗他1979　『雷電下・飯王東』　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ　埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集　埼玉県教育委員会

佐々木幹雄他1980　『大久保山Ⅰ』　早稲田大学本庄校地文化財調査室

佐々木幹雄他1993　『大久保山Ⅱ』　早稲田大学本庄校地文化財調査室

鳴田光一　1993　『須恵器有蓋三足壺考』　『古文化談叢』第30集（中）　九州古文化研究会

鈴木徳雄　1984　『いわゆる北武蔵系土師器坏の動態』　『土曜考古』第９号　土曜考古学研究会

鈴木徳雄　1988a『中畑遺跡・塚本山古墳群』　児玉町遺跡調査会報告書第３・４集　児玉町遺跡調査会

鈴木徳雄　1988b『真続寺後遺跡Ⅱ』　児玉町文化財調査報告書第８集　児玉町教育委員会

鈴木徳雄　1990　『真下境東遺跡』　児玉町文化財調査報告書第９集　児玉町教育委員会

鈴木徳雄　1991　『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』　児玉町文化財調査報告書第15集　児玉町教育委員会

鈴木徳雄他1995　『堀向・藤塚Ａ・柿島・内手Ｂ・Ｃ・児玉条里遺跡』　児玉町文化財調査報告書第18集　児玉町教育委員会

立石盛詞　1982　『後張』Ⅹ　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告第15集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

立石盛詞　1983　『後張』Ⅹ　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告第26集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

徳山寿樹　1994　『平塚・左口・児玉条里遺跡』　児玉町文化財調査報告書第16集　児玉町教育委員会

富田和夫・赤熊浩一1985　『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群ー一丁目・川越田・梅沉』　児玉工業団地関　係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ（取付道路）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集　財団法　人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

長谷川勇　1983　『二本松遺跡発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第５集１分冊　本庄市教育委員会

長谷川勇　1985　『夏目遺跡発掘調査報告書』　本庄市埋蔵文化財調査報告第５集２分冊　本庄市教育委員会

長谷川勇　1987　『社具路遺跡発掘調査報告書』図版編　本庄市埋蔵文化財調査報告第５集３分冊　本庄市教育委員会

細田　勝　1984　『向田・権現塚・村後』　県道鉢川・蓼済寺線関係埋蔵文化財調査報告　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

本庄市　1976　『本庄市史　資料編』

本庄市　1986　『本庄市史　通史編Ⅰ』

増田逸朗　1977　『塚本山古墳群』　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ　埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集　埼玉県教育委員会

増田一裕　1987a『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第９集第１分冊　本庄市教育委員会

増田一裕　1987b『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集　本庄市教育委員会

増田一裕　1989a『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第９集第２分冊　本庄市教育委員会

増田一裕　1989b『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集　本庄市教育委員会

増田一裕　1990　『山根遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第18集　本庄市教育委員会

増田一裕　1991　『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第９集第３分冊　本庄市教育委員会

増田一裕　1992　『女堀川条里今井地区前田甲遺跡発掘調査報告書』ー遺構編ー本庄市埋蔵文化財調査報告第20集　本庄市教育委員会

丸山治雄他1991　『株木Ｂ遺跡』　都市計画街路　小林・立石線第２・３期道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書図版編　群馬県藤岡市教育委員会　群馬県藤岡市

宮崎朝雄　1978　『中堀・耕安地・久城前』　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ　埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集　埼玉県教育委員会

大和　修　1983　『若宮台』　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集　埼玉県教育委員会

今井川越田遺跡住居跡一覧表

NO	住居番号	平面形	長径×短径	主軸方位	竈位置	柱穴	貯蔵穴	壁溝	住居群	備考
1	1	方形	5.20×5.04	N−122°−W	南西壁	無	無	無	1	
2	2	長方形	2.52×3.00	N− 30°−W	北西壁	無	無	一部	—	
3	3	長方形	3.46×2.70	N− 56.5°−E	東隅	無	無	無	—	
4	4	長方形	8.06×5.72	N− 56°−E	不明	4	無	無	1	
5	5	長方形	4.88×4.30	N−147°−E	南西壁	4	無	一部	2	
6	6	方形	6.24×6.08	N− 20°−E	北壁	4	無	ほぼ全周	3	間仕切り溝
7	7	長方形	3.84×3.40	N− 86.5°−E	不明	13	無	無	—	
8	8	長方形	4.35×3.14	N− 33°−W	北西壁	4	竈右側	無	2	
9	9	不明	(0.72×0.38)	N−105.5°−W	南壁	無	無	無	1	竈のみ
10	10	不明	—	—	南壁	無	無	無	1	竈のみ
11	11	長方形	4.22×3.48	N− 93°−W	東壁	無	無	無	—	
12	12	台形	5.16×4.48	N− 20°−E	北壁	9	無	無	3	
13	13	方形	7.97×7.93	N− 10°−W	南西壁	4	竈左側	ほぼ全周	2	
14	14	方形	3.48×3.06	N−163.5°−E	南壁	4	無	無	2	
15	15	方形	4.46×4.44	N−115.5°−E	西壁	4	竈右側	無	2	
16	16	長方形	(4.24×4.24)	N− 23.5°−W	南壁	5	無	無	2	
17	17	長方形	5.36×4.52	N− 44.5°−E	南西壁	4	無	一部	4	
18	18	長方形	3.46×2.15	N− 6°−E	不明	無	無	無	—	
19	19	方形	4.60×4.28	N− 55°−E	西壁	5	竈左側	一部	3	
20	20	不明	(1.40×0.55)	N− 10°−W	不明	—	—	無	3	
21	21	不明	—	N−164.5°−W	南壁	—	—	—	2	煙道部のみ
22	22	不明	—	N−135°−E	東壁	4	無	無	4	煙道部のみ
23	23	方形	4.48×4.48	N−103°−W	西壁	3	竈左側	無	4	
24	24	長方形	5.28×5.00	N− 48°−E	北東壁	2	無	無	4	
25	25	方形	5.48×5.32	N− 5°−E	北壁	2	竈右側	無	4	
26	26	方形	5.12×4.76	N− 20.5°−W	北壁	3	無	無	4	
27	27	不明	—	N− 56.5°−E	東壁	—	—	—	4	竈のみ
28	28	方形	5.28×5.08	N− 96.5°−W	西壁	4	竈左側	ほぼ全周	4	
29	29	長方形	4.80×4.52	N− 94°−E	東壁	11	竈右側	一部	3	壁外ピット
30	30	方形	(3.60×3.45)	N−131.5°−W	不明	3	無	無	2	
31	31	台形	3.76×3.07	N−100°−W	西壁	無	無	無	5	
32	32	長方形	5.03×3.92	N− 81°−E	東壁	無	無	無	5	
33	33	方形	2.92×2.70	N− 82°−E	東壁	3	無	無	5	
34	34	方形	3.98×3.74	N− 77°−E	東壁	4	無	ほぼ全周	5	
35	35	長方形	3.44×2.68	N− 22°−W	—	1	無	無	4	竪穴状遺構？
36	36	台形	3.36×3.24	N− 35°−E	北東壁	3	無	ほぼ全周	5	壁柱穴多数
37	37	長方形	4.20×3.82	N− 71°−E	不明	無	無	無	5	
38	39	不明	(1.34×1.10)	N− 64°−E	不明	—	—	—	2	
39	40	長方形	5.32×4.72	N− 56°−W	北東壁	2	無	一部	4	
40	41	方形	3.10×3.08	N− 30°−W	東壁	4	無	ほぼ全周	5	
41	42	方形	3.55×3.40	N−131°−E	南西壁	3	竈左側	無	5	竈２カ所
42	43	方形	5.36×5.04	N− 35°−W	東壁	6	竈右側	ほぼ全周	4	
43	44	長方形	4.77×4.37	N−106°−E	東壁	3	無	無	5	
44	45	方形	6.00×5.46	N− 53°−W	不明	4	東隅	無	4	
45	46	方形	4.64×4.24	N− 90°−W	東壁	4	竈右側	無	4	
46	47	平行四辺形	6.62×6.35	N− 64.5°−W	東壁	6	竈右側	ほぼ全周	6	
47	48	方形	2.62×2.58	N− 67°−W	西壁	無	無	無	6	SK1を切る
48	49	方形	(3.63×1.70)	N−125°−W	西壁	無	無	無	6	
49	50	平行四辺形	5.22×4.62	N− 59.5°−E	東壁	8	竈右側	ほぼ全周	6	
50	51	長方形	(4.80×3.68)	N−121°−W	南西壁	3	無	無	3	
51	52	方形	(5.20×2.00)	N− 46°−E	不明	3	無	一部	3	
52	53	不明	—	—	西壁	—	—	—	3	竈燃焼部
53	54	不明	(4.40×4.30)	N− 60°−E	不明	—	—	—	6	壁柱穴
54	55	方形	3.35×3.25	N− 77°−E	東壁	2	無	無	6	
55	56	方形	5.30×5.20	N− 41°−W	北西壁	4	竈右側	一部	6	
56	57	台形	5.25×4.87	N− 27°−E	北壁	5	竈右側	ほぼ全周	6	
57	58	方形	4.74×4.41	N− 73.5°−E	東壁	4	無	ほぼ全周	6	
58	59	方形	4.99×4.67	N− 6.5°−W	北壁	5	無	全周	6	
59	60	長方形	4.16×3.75	N− 12°−W	北壁	2	無	一部	7	
60	61	長方形	3.28×2.90	N− 75.5°−E	東壁	2	無	一部	7	

NO	住居番号	平面形	長径×短径	主軸方位	竈位置	柱穴	貯蔵穴	壁溝	住居群	備考
61	62	方形	4.57×4.54	N－52.5°－E	北東壁	5	竈右側	全周	7	
62	63	不明	(7.97×7.93)	N－10°－W	不明	－	－	－	4	
63	64	不明	4.05×4.00	N－4.5°－W	不明	無	無	無	4	
64	65	方形	(3.40×1.50)	N－89.5°－W	西壁	2	無	無	4	
65	66	平行四辺形	4.08×4.02	N－64.5°－E	東壁	4	無	ほぼ全周	6	
66	67	方形	3.76×3.32	N－52°－E	北西壁	4	竈右側	無	7	
67	68	長方形	5.39×5.00	N－59.5°－E	北東壁	4	竈左側	一部	7	
68	69	長方形	4.40×4.11	N－38.5°－W	不明	3	無	無	6	
69	70	不明	－	－	－	－	－	－	8	竈燃焼部底面のみ
70	71	方形	4.11×4.08	N－60°－E	東壁	4	竈左側	ほぼ全周	8	
71	72	方形	5.42×5.27	N－S	不明	4	－	ほぼ全周	8	
72	74	台形	7.97×7.93	N－10°－W	北壁	4	竈右側	ほぼ全周	8	
73	75	方形	(3.20×3.21)	N－54°－E	不明	－	－	－	－	
74	76	方形	3.74×3.67	N－58.5°－W	北東壁	6	無	ほぼ全周	7	
75	77	長方形	(2.07×2.04)	N－59.5°－E	不明	無	無	無	8	竪穴状遺構？
76	78	長方形	5.22×4.54	N－90°－W	西壁	6	－	一部	8	
77	79	不明	－	－	不明	－	－	一部	4	
78	80	方形	5.48×5.16	N－42°－W	北西壁	2	無	無	8	
79	81	方形	5.80×5.56	N－30°－W	不明	無	無	ほぼ全周	8	
80	82	方形	6.06×5.68	N－55°－W	北東壁	4	無	一部	8	
81	84	方形	4.07×4.06	N－129.5°－W	南西壁	3	無	ほぼ全周	7	
82	85	方形	4.21×3.83	N－59°－E	東壁	4	無	ほぼ全周	7	
83	86	長方形	4.58×4.07	N－52.5°－E	北東壁	無	無	無	7	
84	87	長方形	5.64×5.05	N－88°－E	東壁	無	竈右側	無	7	
85	88	長方形	6.92×6.40	N－73°－E	東壁	4	竈右側	ほぼ全周	7	
86	89	方形	4.66×(2.20)	N－70°－E	不明	無	無	無	7	
87	90	長方形	5.17×4.66	N－29°－W	北壁	3	竈右側	一部	7	
88	91	台形	6.35×5.08	N－18°－W	北壁	4	無	一部	7	
89	92	長方形	(3.72×3.30)	－	－	－	－	－	7	竪穴状遺構
90	93	平行四辺形	5.93×5.81	N－101.5°－W	西壁	5	竈左側	一部	7	
91	94	不明	5.78×(1.60)	N－101.5°－W	不明	－	－	－	7	
92	95	不明	－	N－15°－W	北壁	－	－	－	7	竈煙道部
93	96	方形	4.04×3.96	N－96°－W	西壁	4	無	一部	7	
94	97	方形	6.21×5.96	N－73°－E	東壁	3	無	ほぼ全周	7	
95	98	方形	5.20×4.89	N－64°－E	東壁	4	無	一部	7	
96	99	不明	－	N－133.5°－W	西壁	－	－	－	7	竈煙道部
97	100	台形	6.79×6.74	N－74°－E	東壁	4	竈右側	ほぼ全周	7	
98	151	不明	－	N－69°－E	東壁	－	－	－	7	竈煙道部
99	152	方形	6.83×6.62	N－105.5°－E	西壁	4	竈左側	ほぼ全周	7	
100	153	不明	(2.78×1.03)	N－90°－E	不明	－	－	無	7	
101	154	方形	4.48×2.34	N－34°－W	不明	2	無	一部	7	
102	155	方形	2.43×2.34	N－55.5°－E	東壁	無	無	無	－	
103	156	方形	4.51×4.39	N－70°－E	東壁	2	竈両側	ほぼ全周	9	
104	157	不明	(3.10×－)	N－105.5°－W	西壁	無	無	無	9	竈壁
105	158	不明	(4.44×0.77)	N－30°－W	－	－	－	－	4	
106	159	不明	(5.46×4.10)	N－39.5°－W	－	－	－	一部	4	
107	160	方形	4.90×4.59	N－76.5°－E	東壁	4	竈右側	ほぼ全周	8	
108	161	不明	－	－	－	－	不明	無	－	
109	162	方形	3.70×0.94	N－5°－W	不明	無	無	無	8	
110	163	不明	(0.52×0.40)	N－95°－W	西壁	－	－	－	8	
111	164	不明	(1.10×0.36)	N－73.5°－E	東壁	3	無	無	8	
112	165	方形	4.25×4.07	N－121°－W	西壁	5	竈左側	一部	8	
113	167	長方形	4.52×2.78	N－121°－E	不明	2	北壁	ほぼ全周	8	
114	168	方形	(3.08×2.72)	N－15°－W	不明	無	無	一部	8	
115	169	平行四辺形	4.09×3.84	N－87.5°－E	南東隅	2	無	一部	－	
116	170	方形	4.48×4.16	N－102°－W	西壁	無	無	ほぼ全周	9	
117	171	方形	5.20×5.04	N－122°－W	西壁	4	竈左側	ほぼ全周	9	
118	172	方形	3.56×3.33	N－63°－E	不明	無	無	無	8	
119	173	長方形	4.61×4.03	N－122°－W	西壁	4	無	ほぼ全周	9	
120	178	長方形	7.57×6.53	N－9°－W	北壁	無	無	ほぼ全周	8	

附　　篇

今井川越田遺跡出土土器胎土分析鑑定報告

(株) 第四紀 地質研究所　井上　巌

目　次

1　実験条件
2　実験結果の取扱
3　X線回折試験結果
　3－1　タイプ分類
　3－2　石英—斜長石の相関について
4　まとめ

図表目次

第1図　三角ダイヤグラム位置分類図
第2図　菱形ダイヤグラム位置分類図
第3図　Mo—Mi—Hb三角ダイヤグラム
第4図　Mo—Ch、Mi—Hb菱形ダイヤグラム
第5図　Qt—Pl図（総合）
第6図　Qt—Pl図（今井川越田、梅沢、福川）
第1表　胎土性状表
第2表　タイプ分類一覧表（総合）
第3表　タイプ分類一覧表（今井川越田）

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1　実験条件

1－1　試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、φ10㎜の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1－2　X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX—8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40KV, Current: 30mA、ステップ角度：0.02°

計数時間：0.5SEC。

1－3　電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製5300LV型電子顕微鏡を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真を撮影した。

35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2　実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折

試験で得られたムライト（Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2－1　組成分類

1）Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム

第1図に示すように三角ダイヤグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mica)、角閃石（Hb）のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（%）で表示する。

モンモリロナイトはMo/Mo+Mi+Hb*100でパーセントとして求め、同様にMi、Hbも計　算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の1～4はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各項点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第1図に示す通りである。

2）Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム

第2図に示すように菱形ダイヤグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。記載不能は次の条件でおこる、モンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、緑泥石（Ch）のうち、

a）3成分以上含まれない、b）Mont、chの2成分が含まれない、c）Mi、Hbの2成分が含まれないの3例がある。

菱形ダイヤグラムはMont-Ch、Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mica-Hbのそれぞれのx線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mo/Mo+Ch*100と計算し、Mi、Hb、Chも各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイヤグラム内にある1～7の領域ではMo、Mi、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Chのうち3成分、各項点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第2図に示す通りである。

2－2　焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト（Mullite）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト(Cristobalite)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

a）焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

b）焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

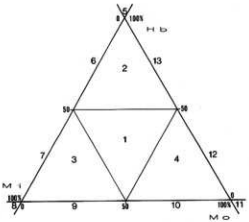
c）焼成ランクⅢ：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

d）焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

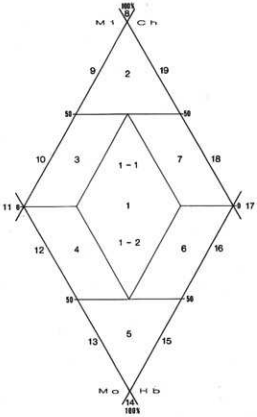
e）焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現す

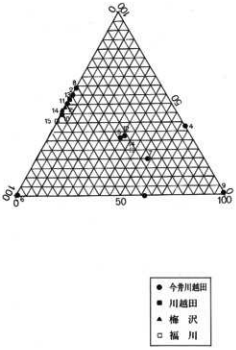
第1図　三角ダイヤグラム位置分類図



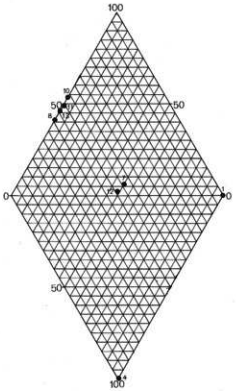
第2図　菱形ダイヤグラム位置分類図



第3図　Mo−Mi−Hb 三角ダイヤグラム



第4図　Mo−Ch，Mi−Hb 菱形ダイヤグラム



第1表　胎土性状表

試料-No.	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物															備考	
			Mo-Mc-Hb	Mo-Cb, Mc-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス		
今井川越田-1	L	Ⅲ	10	17	218	130				1,016	549									坏	
今井川越田-2	G	Ⅲ	6	20		117	143			2,123	295									坏	
今井川越田-3	P	Ⅰ～Ⅱ	14	20						1,549	153									坏	
今井川越田-4	O	Ⅲ	12	14	241		118			977	226	119								坏	
今井川越田-5	B	Ⅲ	1	15	202	189	190			2,204	378									坏	
今井川越田-6	K	Ⅲ	8	20		125				1,020	481	176								坏	
今井川越田-7	A	Ⅲ	1	1	259	131	102	263		1,991	309			203						坏	
今井川越田-8	F	Ⅲ	6	10		129	180	243		1,392	1,072				63					坏	暗文
今井川越田-9	N	Ⅲ	11	20	219					2,334	329	116								坏	比企型坏
今井川越田-10	H	Ⅲ	7	9		232	209	292	161	1,619	1,100									支脚	
今井川越田-11	F	Ⅲ	6	10		150	153	296		1,921	802				64					支脚	
今井川越田-12	A	Ⅱ～Ⅲ	1	1	193	185	179	257		1,155	828	95								支脚	
川越田-13	F	Ⅲ	6	10		122	132	168		1,683	1,601									ミニチュア	6世紀後半
梅沢-14	I	Ⅲ	7	20		202	177			2,017	1,115	98								支脚	6世紀後半
梅沢-15	H	Ⅲ	7	9		137	129	207		730	958	185								手づくね	6世紀後半
福川-14	C	Ⅲ	1	16	198	146	115			2,731	405									坏	6世紀（八日市遺跡）
福川-15	I	Ⅲ	7	20		138	91			338	131			145						坏	6世紀（八日市遺跡）
稲荷前-1	N	Ⅲ	11	20	255					2,167	226									坏―比企型	7CE
稲荷前-2	N	Ⅲ	11	20	185					2,385	401	114								坏―比企型	7CE
稲荷前-3	K	Ⅲ	8	20		114				2,160	292	107								坏―比企型	7CM
稲荷前-4	N	Ⅲ	11	20	190			199		2,092	342	111								坏―比企型	7CE
稲荷前-5	E	Ⅲ	5	20			218			2,935	316	205								坏―級比企型	7CL～8CE
稲荷前-6	C	Ⅲ～Ⅳ	1	16	222	164	83			2,258	412									坏―級比企型	7CL～8CE
稲荷前-51	L	Ⅲ	10	17	226	155				2,223	457	108								碗	8CE
稲荷前-52	M	Ⅲ	10	19	284	130		288		2,280	350									坏	7CL
稲荷前-54	L	Ⅲ	10	17	227	154				2,810	274									坏	7CL
稲荷前-55	K	Ⅲ	8	20		162				2,567	411									坏	7CL
稲荷前-56	P	Ⅲ	14	20				226		2,277	396									坏	7CM
小敷田-16	J		8	8		122		186		1,519	882									坏―鬼高	
小敷田-17	O		12	14	229		96			2,408	368									坏―鬼高	
小敷田-18	P		14	20						2,722	684									坏―鬼高	
小敷田-19	J		8	8		125		185		2,051	2,366	215		175						坏―鬼高	
北島-13	H		7	9		228	147	200	78	2,386	588										
北島-14	H		7	9		123	109	168		2,527	378										
北島-15	H		7	9		121	97	170		1,638	958										
北島-16	H		7	9		119	85	160		2,861	482										
村後-2	H		7	9		167	138	224		4,732	1,640									甕	
村後-3	F		6	10		119	159	177		3,470	646									甕	
村後-4	H		7	9		132	110	197		3,699	2,155									甕	
村後-5	F		6	10		221	287	394	128	1,797	822			158						坏	
村後-6	H		7	9		172	118	234	102	2,989	1,454									鉢	

試料-No.	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物															備考
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス	
村後-7	F		6	10		169	239	256	119	1,716	787									甕
村後-8	L		10	17	176	104				1,468	2,048	253								坏
村後-9	C		1	16	484	312	290		228	1,813	1,030	89								甕
村後-10	F		6	10		200	249	261	315	2,435	853									甕
村後-11	P		14	20						1,325	3,025	226	66							坏
村後-12	O		12	14	176		98			1,556	645	206								坏
村後-13	H		7	9		278	272	528	193	1,963	1,116			218						坏
村後-14	F		6	10		37	395	420	210	2,264	575	126								壺
村後-16	I		7	20		167	116			4,295	1,574									甕
村後-17	F		6	10		203	223	347	68	2,266	614									坏
村後-18	H		7	9		181	158	286		2,457	462									坏
村後-19	G		6	20		240	273			1,898	560									長甕
村後-20	H		7	9		211	236	420	218	2,219	944									甕
村後-21	H		7	9		270	254	181		2,288	1,485									長甕
村後-22	G		6	20		106	170			2,219	971			203						坏
村後-23	H		7	9		251	246	357	73	1,694	490			154						坏
村後-24	G		6	20		170	185			2,732	647			163						坏
村後-25	I		7	20		214	133			2,719	754			207						長甕
村後-26	I		7	20		137	112			2,644	1,508									長甕
古井戸-1	P		14	20						1,814	270									
古井戸-2	G		6	20		139	173			1,728	521									
古井戸-3	H		7	9		204	196	202		1,709	561									
古井戸-4	I		7	20		103	75			2,360	712	194								
古井戸-5	I		7	20		153	143			1,956	1,021									
古井戸-6	F		6	10		247	257	265	70	2,461	2,071									
古井戸-7	G		6	20		76	154			2,821	2,203									
古井戸-8	E		5	20			340			1,405	796	138								
古井戸-9	H		7	9		202	186	261		1,907	1,126	149								
古井戸-10	C		1	16	158	132	130			2,193	478									
古井戸-11	G		6	20		114	117			2,302	540									
古井戸-12	I		7	20		228	104			2,717	542	118								
古井戸-13	A		1	1	210	216	106	225		3,378	583									
古井戸-24	G		6	20		164	165			2,301	506									
古井戸-25	H		7	9		176	117	188		2,027	1,038	313								
古井戸-26	K		8	20		97				2,822	838	182								
古井戸-27	I		7	20		104	95			2,497	792	193								
古井戸-28	D		3	1	212	485	215	217		1,968	451									
古井戸-29	H		7	9		367	224	218		1,837	410									
古井戸-30	I		7	20		98	88			2,341	586	178								
古井戸-31	A		1	1	178	123	92	179		3,156	603	165								
古井戸-32	G		6	20		195	361			2,624	1,230	122								
古井戸-33	H		7	9		289	175	227		2,482	576									

試料-No.	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物															備考
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス	
古井戸-34	J		8	8		161		157		1,977	539									
古井戸-35	G		6	20		141	163			2,251	462									
古井戸-36	H		7	9		263	147	256		2,665	836									
古井戸-37	G		6	20		109	129			1,947	543	118								
古井戸-38	F		6	10		188	199	212		2,060	535									
古井戸-39	H		7	9		223	186	267		1,977	642									
古井戸-40	H		7	9		200	142	252		2,016	877	118								
古井戸-41	G		6	20		175	203			2,301	637									
若宮台-1	F		6	10		146	148	182	81	1,577	1,284									坏
若宮台-2	H		7	9		146	96	152		1,886	438	167								坏
若宮台-3	E		5	20			96			1,457	627									椀
若宮台-4	H		7	9		457	153	288	71	2,028	944									椀
若宮台-5	F		6	10		146	207	142		1,672	894	103								坏
若宮台-6	F		6	10		154	182	208		1,962	1,046	151								坏
若宮台-7	I		7	20		158	130			2,865	707	389								坏
若宮台-8	F		6	10		148	167	226		1,685	851	128								坏
若宮台-9	H		7	9		223	148	161		2,936	426									坏
若宮台-10	F		6	10		479	521	518	477	1,247	866			205						坏
若宮台-11	F		6	10		193	197	216		1,851	1,262									坏
若宮台-12	P		14	20						1,807	199									坏
若宮台-13	F		6	10		129	133	155		2,088	1,169									坏
若宮台-14	I		7	20		105	82			2,966	581									坏
樋詰-1	E		5	20			116			1,895	343									
樋詰-2	C		1	16	178	131	89			2,453	753									
樋詰-3	P		14	20						905	593	194								
樋詰-4	I		7	20		106	96			2,739	445									
樋詰-5	C		1	16	195	195	167			2,233	1,116									
樋詰-6	P		14	20						1,060	581	162								
樋詰-7	G		6	20		186	211			2,476	375									
樋詰-8	E		5	20			104			2,896	927									
樋口-9	G		6	20		167	402		76	2,058	593									
樋詰-10	F		6	10		179	224	339	98	2,661	998	128								
樋詰-11	K		8	20		149				1,520	1,262	222								
樋詰-12	L		10	17	179	134				2,919	523	130								
樋詰-13	C		1	16	184	144	109			3,062	492									
砂田前-1	C		1	16	169	125	101			3,277	1,051	193								
砂田前-2	B		1	15	192	168	199			2,757	1,112									
砂田前-3	P		14	20						2,224	479									
砂田前-4	E		5	20			116			808	400	145								
砂田前-5	C		1	16	105	88	71			2,759	593	146								
砂田前-6	I		7	20		125	110			2,805	755	150								
砂田前-7	I		7	20		132	88			2,331	479									

試料-No.	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														備考
			Mo-Mf-Hb	Mo-Ch, Mf-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス	
砂田前-8	G		6	20		78	84			3,559	506									
砂田前-9	I		7	20		98	87			3,551	424									
砂田前-10	K		8	20		142				3,738	449	125								
砂田前-11	I		7	20		129	102			3,568	570									
砂田前-12	E		5	20			128			2,944	479									
砂田前-13	K		8	20		124				1,970	495									
砂田前-14	I		7	20		128	101			3,095	474									
砂田前-15	I		7	20		129	97			2,281	450									
砂田前-16	K		8	20		131				3,076	464	134								
砂田前-17	I		7	20		134	97			2,560	400									
砂田前-18	I		7	20		131	105			2,980	421									
砂田前-19	P		14	20				154		2,463	662	142								
砂田前-20	F		6	10		143	174	184	130	2,677	613									
新屋敷東-1	I		7	20		95	83			2,175	749	309								
新屋敷東-2	I		7	20		72	64			2,283	300	180								
新屋敷東-3	E		5	20			95			2,471	390									
新屋敷東-4	N		11	20	170					1,643	1,769									
新屋敷東-5	L		10	17	170	113			117	1,186	479	233								
新屋敷東-6	P		14	20						1,343	762	249								
新屋敷東-7	P		14	20						1,878	1,321	254								
新屋敷東-8	I		7	20		112	97			2,131	706	291								
新屋敷東-9	E		5	20			151			1,497	617									
新屋敷東-10	K		8	20		120				1,210	938	232								
新屋敷東-11	P		14	20						1,753	644	197								
新屋敷東-12	C		1	16	158	116	100			2,198	715	137								
新屋敷東-13	E		5	20			63			2,179	908	145								
新屋敷東-14	E		5	20			110			1,425	603	181								
新屋敷東-15	G		6	20		97	110			1,853	783									
新屋敷東-16	P		14	20						2,850	344	124								
新屋敷東-17	I		7	20		119	87			2,792	358			229						
新屋敷東-18	H		7	9		152	97	195		1,697	423									
福川-14	C		1	16	198	146	115			2,731	405	116								环一土師器
福川-15	I		7	20		138	91			2,254	338	131		145						环一土師器
清水上-5	H	Ⅲ－Ⅳ	7	9		246	137	240	174	1,685	328	118							鼎-中脚	支脚

ることになるが、この点については第１表の右端の備考に理由を記した。

3　Ｘ線回折試験結果

3－1　タイプ分類

今井川越田遺跡出土の土器の胎土分析は第１表胎土性状表に示す通りである。第１表には今井川越田遺跡のほかに関連する遺跡の土器も記載してある。これら関連する遺跡の土器と今井川越田遺跡の土器の全部で胎土のタイプ分類を行った。第２表タイプ分類一覧表(総合）には全部の土器、第３表タイプ分類一覧表には今井川越田遺跡と福川、梅沢遺跡の土器だけを抽出した。土器胎土は第２表に示すように、Ａ～Ｐの16タイプに分類された。最も多いＨタイプには村後、古井戸、北島の土器が集中し、Ｉタイプには砂田前、古井戸の土器が集中する。Ｆタイプには若宮台、村後の土器、Ｇタイプには古井戸の土器、Ｅタイプには新屋敷東、Ｃタイプには撫詰、砂田前の土器が集中し、各タイプで特徴が認められる。

今井川越田、福川、梅沢遺跡出土土器は第３表に示すように、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｆ、Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｋ、Ｌ、Ｎ、Ｏ、Ｐの12タイプが検出された。17個の分析に対して12タイプの胎土というのは多く、多種にわたることを意味している。

Ａタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの４成分を含む。今井川越田の坏と支脚。

Ｂタイプ：Mont、Mica、Hbの３成分を含み、Ch１成分に欠ける。今井川越田の坏。

Ｃタイプ：Mont、Mica、Hbの３成分を含み、Ch１成分に欠ける。
組成的にはＢタイプと同じであるが強度が異なる。福川の坏。

Ｆタイプ：Mica、Hb、Chの３成分を含み、Mont１成分に欠ける。今井川越田の支脚と暗文の坏、川越田のミニチュア土器。

Ｇタイプ：Mica、Hbの２成分を含み、Mont、Chの２成分に欠ける。今井川越田の坏。

Ｈタイプ：Mica、Hb、Chの３成分を含み、Mont、１成分に欠ける。
組成的にはＦタイプと同じであるが強度が異なる。今井川越田支脚と梅沢の手づくね土器。

Ｉタイプ：Mica、Hbの２成分を含み、Mont、Chの２成分に欠ける。
組成的にはＧタイプと同じであるか強度が異なる。
梅沢の支脚と福川の坏。

Ｋタイプ：Mica １成分を含み、Mont、Hb、Chの３成分に欠ける。今井川越田の坏。

Ｌタイプ：Mont、Micaの２成分を含み、Hb、Chの２成分に欠ける。今井川越田の坏。

Ｎタイプ：Mont １成分を含み、Mica、Hb、Chの３成分に欠ける。今井川越田の坏

Ｏタイプ：Mont、Hbの２成分を含み、Mica、Chの２成分に欠ける。今井川越田の坏。

Ｐタイプ：Mont、Mica、Hb、Chの４成分に欠ける。主に、nAl2O3・mSiO2・1H2O（アルミナゲル）で構成される。今井川越田の坏。

以上のように土器胎土は多種にわたり、土器の種類も多種にわたると推察された。

3－2　石英（Qt）－斜長石（Pl）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。第5図 Qt—Pl 図には今井川越田遺跡出土の土器と周辺の遺跡から出土した土器を記載してある。第6図には今井川越田遺跡出土の土器と川越田、梅沢、福川の各遺跡から出土した土器を記載してある。

第5図で明らかな様に、土器はⅠ～XVIの16グループと〝その他〟に分類された。

Ⅰグループ：今井川越田の坏が集中する。

Ⅱグループ：今井川越田の支脚が集中し、若宮台と新屋敷の土器が共存する。

Ⅲグループ：新屋敷東と古井戸、若宮台の土器で構成される。

Ⅳグループ：今井川越田の坏と清水上の支脚、樋詰、古井戸、若宮台の土器が混在する。

Ⅴグループ：今井川越田の支脚と村後、新屋敷東の土器が混在。

Ⅵグループ：古井戸の土器が集中し、樋詰、村後、砂田前の土器が混在する。

Ⅶグループ：古井戸、若宮台、村後の土器が集中し、樋詰、梅沢、新屋敷東の土器が混在する。

Ⅷグループ：新屋敷東の土器だけで構成される。

Ⅸグループ：古井戸、村後、砂田前の土器が集中し、北島と樋詰の土器が混在する。

Ⅹグループ：今井川越田の坏が集中し、稲荷前の比企型坏も集中する。
小敷田、新屋敷東、北島、砂田前の土器が混在する。

XIグループ：村後の土器だけで構成される。

XIIグループ：砂田前、古井戸、村後の土器が共存し、樋詰と若宮台の土器が混在する。

XIIIグループ：砂田前、稲荷前、新屋敷東、樋詰の土器が共存し、北島、福川、若宮台の土器が混在する。

XIVグループ：砂田前の土器が集中し、古井戸と村後の土器が混在する。

XVグループ：村後の土器だけで構成される。

〝その他〟：斜長石の強度が高い領域に村後、古井戸等の土器が分散して分布する。今井川越田－13のミニチュア土器も斜長石の強度が高い領域にあり、異質である。梅沢－15の手づくね土器と福川－15の坏は石英の強度が低い領域にあり異質である。

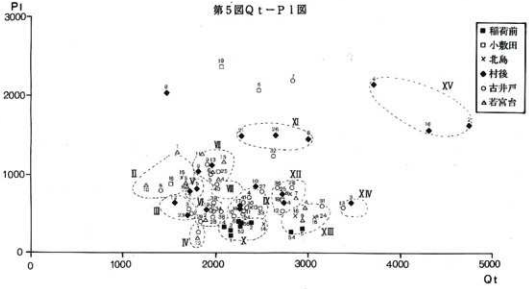
以上のような土器の全体の傾向が認められた。

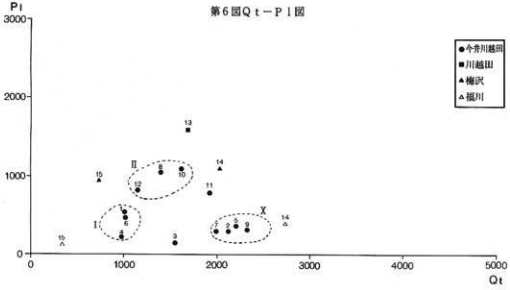
今井川越田の土器は第６図に示すように、Ⅰ、Ⅱ、Ⅹの３グループに集中する。Ⅹグループは比企型坏が集中するグループで、今井川越田－９の比企型坏もこのグループに入る。Ⅰグループには今井川越田の坏、Ⅱグループには今井川越田の支脚が集中する。

今井川越田－13のミニチュア土器、梅沢、福川の土器は分散し、どのグループにも入らないものがある。第６図で明らかな様に、今井川越田と梅沢、福川の土器は分散しており、土器の胎土のタイプと同じ傾向を示す。

4　まとめ

1）今回分析した今井川越田、梅沢、福川の各遺跡出土土器と周辺遺跡出土土器とあわせ、タイプ分類を行った。全体ではＡ～Ｐの16タイプに分類された。今井川越田、梅沢、福川の各遺跡出土の土器は１７個の分析に対してＡ、Ｂ、Ｃ、Ｆ、Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｋ、Ｌ、Ｎ、Ｏ、Ｐの12タイプに分類された。17個に対して12タイプということは多種の胎土を意味し、多種の土器を意味している。





第2表　タイプ分類一覧表

試料-No	タイプ分類	備　考
今井川越田-7	A	坏
今井川越田-12	A	支脚
古井戸-13	A	
古井戸-31	A	
今井川越田-5	B	坏
砂田前-2	B	
福川-14	C	坏
稲荷前-6	C	坏—統比企型
村後-9	C	甕
古井戸-10	C	
樋詰-2	C	
樋詰-5	C	
樋詰-13	C	
砂田前-1	C	
砂田前-5	C	
新屋敷東-12	C	
福川-14	C	坏—土師器
古井戸-28	D	
稲荷前-5	E	坏—統比企型
古井戸-8	E	
若宮第-3	E	椀
樋詰-1	E	
樋詰-8	E	
砂田前-4	E	
砂田前-12	E	
新屋敷東-3	E	
新屋敷東-9	E	
新屋敷東-13	E	
新屋敷東-14	E	
今井川越田-8	F	坏
今井川越田-11	F	支脚
川越田-13	F	ミニチュア

試料-No	タイプ分類	備　考
村後-3	F	甕
村後-5	F	坏
村後-7	F	甕
村後-10	F	甕
村後-14	F	壺
村後-17	F	坏
古井戸-6	F	
古井戸-38	F	
若宮台-1	F	坏
若宮台-5	F	坏
若宮台-6	F	坏
若宮台-8	F	坏
若宮台-10	F	坏
若宮台-11	F	坏
若宮台-13	F	坏
樋詰-10	F	
砂田前-20	F	
今井川越田-2	G	坏
村後-19	G	長甕
村後-22	G	坏
村後-24	G	坏
古井戸-2	G	
古井戸-7	G	
古井戸-11	G	
古井戸-24	G	
古井戸-32	G	
古井戸-35	G	
古井戸-37	G	
古井戸-41	G	
樋詰-7	G	
樋詰-9	G	
砂田前-8	G	

試料-No	タイプ分類	備　考
新屋敷東-15	G	
今井川越田-10	H	支脚
梅沢-15	H	手づくね
北島-13	H	
北島-14	H	
北島-15	H	
北島-16	H	
村後-2	H	甕
村後-4	H	甕
村後-6	H	鉢
村後-13	H	坏
村後-18	H	坏
村後-20	H	甕
村後-21	H	長甕
村後-23	H	坏
古井戸-3	H	
古井戸-9	H	
古井戸-25	H	
古井戸-29	H	
古井戸-33	H	
古井戸-36	H	
古井戸-39	H	
古井戸-40	H	
若宮台-2	H	坏
若宮台-4	H	椀
若宮台-9	H	坏
新屋敷東-18	H	
清水上-5	H	支脚
福川-15	I	坏
梅沢-14	I	支脚
村後-16	I	甕
村後-25	I	長甕

試料-No	タイプ分類	備　考
村後-26	I	長甕
古井戸-4	I	
古井戸-5	I	
古井戸-12	I	
古井戸-27	I	
古井戸-30	I	
若宮台-7	I	坏
若宮台-14	I	坏
樋詰-4	I	
砂田前-6	I	
砂田前-7	I	
砂田前-9	I	
砂田前-11	I	
砂田前-14	I	
砂田前-15	I	
砂田前-17	I	
砂田前-18	I	
新屋敷東-1	I	
新屋敷東-2	I	
新屋敷東-8	I	
新屋敷東-17	I	
福川-15	I	坏—土師器
小敷田-16	J	坏—鬼高
小敷田-19	J	坏—鬼高
古井戸-34	J	
今井川越田-6	K	坏
稲荷前-3	K	坏—比企型
稲荷前-55	K	坏
古井戸-26	K	
樋詰-11	K	
砂田前-10	K	
砂田前-13	K	

試料-No	タイプ分類	備　考
砂田前-16	K	
新屋敷東-10	K	
今井川越田-1	L	坏
稲荷前-51	L	碗
稲荷前-54	L	坏
村後-8	L	坏
樋詰-12	L	
新屋敷東-5	L	
稲荷前-52	M	坏
今井川越田-9	N	坏
稲荷前-1	N	坏—比企型
稲荷前-2	N	坏—比企型
稲荷前-4	N	坏—比企型
新屋敷東-4	N	
今井川越田-4	O	坏
小敷田-17	O	坏—鬼高
村後-12	O	坏
今井川越田-3	P	坏
稲荷前-56	P	坏
小敷田-18	P	坏—鬼高
村後-11	P	坏
古井戸-1	P	
若宮台-12	P	坏
樋詰-3	P	
樋詰-6	P	
砂田前-3	P	
砂田前-19	P	
新屋敷東-6	P	
新屋敷東-7	P	
新屋敷東-11	P	
新屋敷東-16	P	

第３表　タイプ分類一覧表（今井川越田）

試料No	タイプ分類	備　考	
今井川越田-１	L	坏	
今井川越田-２	G	坏	
今井川越田-３	P	坏	
今井川越田-４	O	坏	
今井川越田-５	B	坏	
今井川越田-６	K	坏	
今井川越田-７	A	坏	
今井川越田-８	F	坏	線文
今井川越田-９	N	坏	比企型坏
今井川越田-10	H	支脚	
今井川越田-11	F	支脚	
今井川越田-12	A	支脚	
川越田-13	F	ミニチュア	
梅沢-14	I	支脚	
梅沢-15	H	手づくね	
福川-14	C	坏	６世紀（八日市遺跡）
福川-15	I	坏	６世紀（八日市遺跡）

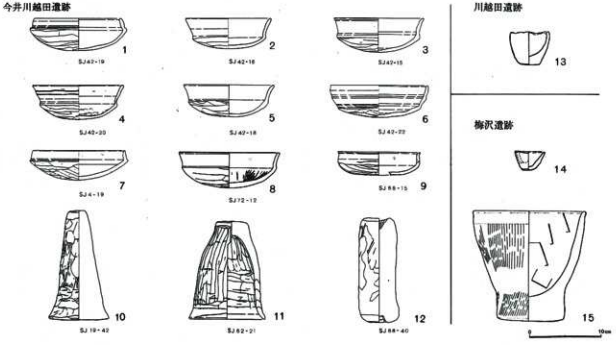
２）電子顕微鏡によるガラスの分析では中粒のガラスが生成した焼成ランクⅢのものがほとんどである。今井川越田－３は粗粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅠ～Ⅱと高い。今井川越田－12は中～粗粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅡ～Ⅲと幾分高い。

３）Qt（石英）とPl（斜長石）の相関では周辺の遺跡の土器とあわせた第５図に示すようにⅠ～ⅩⅤの１５グループと〝その他〟に分類された。

各グループには特定の遺跡の土器が集中し、他の遺跡の土器と共存し、特徴が現われている。

稲荷前遺跡の比企型坏が集中するⅩグループに今井川越田の土器も集中し、今井川越田の土器のなかの比企型坏もこのなかに含まれている。

Ⅰグループには今井川越田の坏、Ⅱグループには今井川越田の支脚が集中する。

今井川越田13のミニチュア土器は斜長石の強度が高く異質である。梅沢と福川の土器と支脚は分散し、特に梅沢－15と福川－15はQt（石英）の強度が低く、異質である。

第７表　胎土分析遺物実測図